要覧
2014

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国立民族学博物館

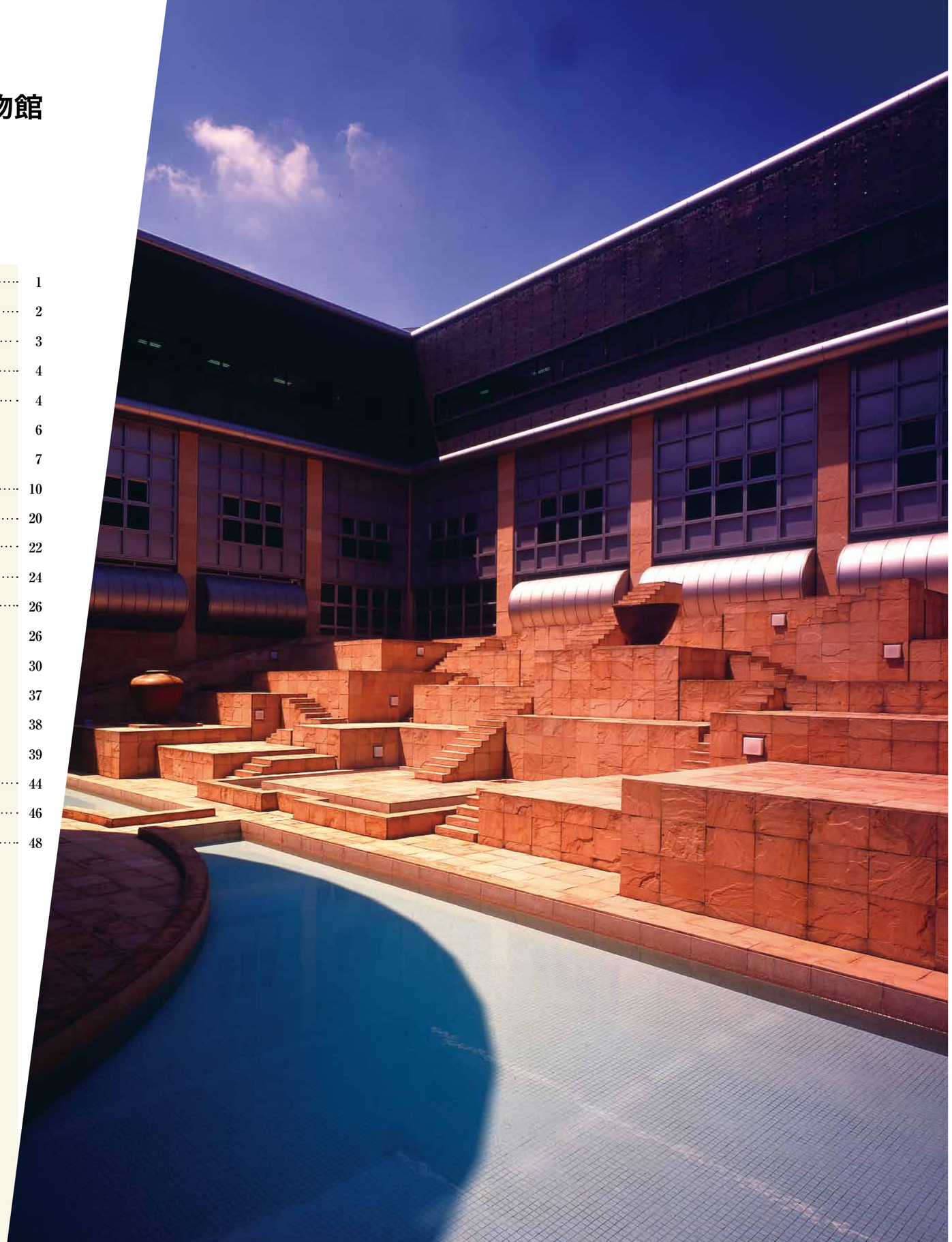
国立民族学博物館

要覧 2014

目次

ごあいさつ …… 1
設置目的と機能 …… 2
沿革 …… 3
歴代館長 …… 4
組織 …… 4
　施設 6
　館員紹介 7
研究活動 …… 10
研究戦略センター …… 20
文化資源研究センター …… 22
国際学術交流室 …… 24
資料・情報の整備と社会還元 …… 26
　資料とデータベース 26
　展示 30
　博物館社会連携 37
　国際協力・研修 38
　広報・事業 39
人間文化研究機構 …… 44
総合研究大学院大学 …… 46
利用案内 …… 48

表紙：「チャン族の装い」（中国地域の文化）より



ごあいさつ

国立民族学博物館（みんぱく）は、博物館機能をもち、大学共同利用機関としての役割をにない、大学院教育をおこなう文化人類学と民族学の研究所です。本年創設40年をむかえます。

みんぱくの研究者たちは、世界各地で社会と文化、グローバル化現象にともなうそれらの革新について現場に身をおいて研究調査をつづけています。同時に、機関研究、共同研究、国際シンポジウムや種々の研究集会を組織し、国内外から1200名を超す研究者を招いて研究を発展させています。さらに、調査地の文化や価値観をふかく理解するため、標本資料や映像・音響資料、文献図書資料など100万点以上の資料類を収集、所蔵してきました。みんぱくは、これらの研究成果を学術情報センターとして研究者コミュニティや一般市民にひろく公開するとともに、展示の新構築や国際連携展示にいかしています。

このほか、おもに大学共同利用機関で構成される総合研究大学院大学の文化科学研究科博士後期課程においては、文化人類学とそれに関連する研究分野の若手人材を養成しています。

ひと・もの・情報が地球上をゆきかい、欲しいものを手に入れやすくなり、私たちの生活はたしかに便利になりました。その一方で、世界のあちこちで支配的な価値観や文化要素が個々の社会や文化に強い影響をおよぼし、人びとの生活環境や思考力を激変させるという気がかりな状況がうまれています。このグローバル化の進行は、地域や民族のあいだの緊張と対立、人びとの経済や情報の格差、そして文化や宗教のちがいによる摩擦や葛藤をますます激しくさせています。

人類が直面するそれらの問題にたいして、文化人類学の専門とする異文化と自文化の実証的研究の重要性が増してきています。社会の多くの方々の探究心や知識欲にどのようにこたえていけばよいのか、私たちもその課題に真剣にとりくんでいます。

みんぱくを、あらたな世界の発見を楽しみ、ゆたかな知識と情報を得ることのできる「知のひろば」にしたいと考えています。

今後ともみなさまからのご助言とご支援をお願いするしだいです。

国立民族学博物館長　須藤健一

設置目的と機能

設置目的

本館は、文化人類学・民族学に関する調査・研究をおこなうとともに、民族資料の収集・整理・公開などの活動をすすめ、世界の諸民族の社会と文化に関する情報を人々に提供し、諸民族についての認識と理解を深めることを目的としています。なお、本館は、大学共同利用機関として、国立学校設置法の一部を改正する法律（昭和49年法律第81号）により設置され、平成16（2004）年4月に国立大学法人法（平成15年法律第112号）により大学共同利用機関法人・人間文化研究機構の一員として新たな出発をしました。

機能

研究所

本館は博物館機能をもった研究所です。文化人類学・民族学を核とし、その隣接諸分野の研究をおこない、我が国の文化人類学・民族学研究のセンターとしてその機能を十分に発揮すると同時に、研究の成果を出版その他さまざまな形で公開し、研究者コミュニティと一般市民への情報提供と研究広報をおこなっています。本館の研究者は、文化人類学・民族学や言語学、生態人類学、考古学、民族技術、民族芸術などを専門とするスタッフで構成されています。

共同利用

本館は大学共同利用機関として、研究者コミュニティに支えられた共同研究をおこなう開かれた研究所です。また、収集・保管する資料は研究のために広く利用されています。

情報センター

研究に基づき、諸民族の生活を知るための標本資料、諸民族の社会と文化に関する映像・音響資料、文献図書資料、HRAF(Human Relations Area Files)などの諸資料を収集し、幅広い研究のための基礎的な資料や情報の整備をおこなっています。これらに関する情報を、コンピュータを活用したデータベースの構築を通じて国内外の研究者へ提供しています。

展示公開

研究の成果を展示を通じて公開しています。本館の研究者は、展示についての企画や実施にも参加しており、研究と展示の緊密な連携を基本方針としています。

本館展示は、世界の諸民族の文化と社会を大きく地域ごとに分けた地域展示と、音楽、言語などの人類文化に普遍的に見られる諸現象を対象とした通文化展示で構成されています。また、急速に変化する世界の動きや、文化人類学・民族学の研究を迅速に展示に反映させるため、本館展示場内で企画展示も実施しています。

さらに、特定のテーマについて、総合的および体系的に紹介する特別展示を開催しています。

社会還元

最先端の研究成果を一般に公開するため、学術講演会、みんぱくゼミナール、みんぱくウィークエンド・サロン、研究公演、みんぱく映画会や種々のワークショップなどをおこなっています。また、博物館学コースや技術研修などさまざまなプロジェクトを通して国際協力に貢献しています。

大学院教育

大学共同利用機関を基盤として設置された総合研究大学院大学の文化科学研究科（地域文化学専攻・比較文化学専攻、ともに博士後期課程）がおかれ、高度の大学院教育をおこない、創造性豊かな研究者を育成しています。また、諸大学の要請に応えてそれぞれの大学院教育に協力し、また大学と連携して研究指導をおこなっています。

沿革

1935	昭和10年		澁澤敬三氏、白鳥庫吉博士を中心に財団法人日本民族博物館の設立を計画
1964	昭和39年	7月	日本民族学会、日本人類学会、日本考古学協会、日本民俗学会および日本民族学協会は、「国立民族学研究博物館設置」について、文部大臣など関係方面に要望
1972	昭和47年		民族学研究博物館の調査に関する会議（座長：桑原武夫）は、文部大臣に「民族学研究博物館の基本構想について（報告）」を提出
1973	昭和48年	4月	国立民族学研究博物館（仮称）の創設準備に関する会議および創設準備室を設置
1974	昭和49年	6月	国立学校設置法の一部を改正する法律（昭和49年法律第81号）の施行により、国立民族学博物館が創設（管理部3課6係、情報管理施設2係、5研究部10研究部門）
		8月	パプアニューギニアをはじめとして、海外における標本資料などの収集を開始
1975	昭和50年	12月	旧文部省史料館が所蔵していた民族資料28,432点を国文学研究資料館から移管
1977	昭和52年	11月	国立民族学博物館新営工事（28,778㎡および環境整備）が竣功、開館式典を挙行。オセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、西アジア、音楽・言語、東南アジア、東アジア（日本の文化）展示およびビデオテークを一般公開
1978	昭和53年		民族学研究の拠点として、長期的・計画的に取り組む「特別研究」を開始
1979	昭和54年	3月	第4展示場（1,272㎡）が竣功、東アジア（日本の文化）展示を拡充し一般公開。11月に中央・北アジア、東アジア（アイヌの文化）展示を一般公開
1981	昭和56年	2月	講堂（3,704㎡）が竣功
1983	昭和58年	3月	第8展示場など（4,816㎡）が竣功。11月に東アジア（朝鮮半島の文化、中国地域の文化）展示を一般公開
1984	昭和59年	11月	創設10周年記念式典を挙行。『国立民族学博物館十年史』を刊行
1987	昭和62年		開館10周年を迎え、記念行事を実施
1989	平成元年	4月	総合研究大学院大学文化科学研究科（地域文化学専攻・比較文化学専攻の二専攻）が本館を基盤として設置
		6月	特別展示館・書庫棟（5,292㎡）が竣功
		9月	特別展示館竣功記念第1回特別展「大アンデス文明展―よみがえる太陽の国インカ」を一般公開
1993	平成5年	8月	本館増築・共同研究棟（891㎡）が竣功
1994	平成6年		創設20周年を迎え、記念行事を実施
		6月	地域研究企画交流センターを設置（2005年度末に廃止）
1995	平成7年	1月	阪神・淡路大震災による被害のため、展示場を45日間にわたり全面閉鎖（2002～2003年に耐震改修工事を実施）
		4月	COE（「卓越した研究拠点」）の研究課題「地球時代におけるマルチメディアによる新しい民族学研究の展開に関する先導的研究」開始（1999年度末に終了）
1996	平成8年	3月	第7展示棟（6,439㎡）が竣功。11月に言語展示、東南アジア展示のリニューアルおよび映像の広場、ものの広場、南アジア展示を一般公開
1997	平成9年		開館20周年を迎え、記念行事を実施。11月に記念式典を挙行
1998	平成10年	4月	大学共同利用機関組織運営規則の一部を改正する省令（平成10年文部省令第24号）の施行により、5研究部を改組（4研究部、1研究施設）
1999	平成11年	5月	みんぱく電子ガイドおよび学習コーナー完成、一般公開
2000	平成12年	3月	東アジア（朝鮮半島の文化）展示リニューアル、以降2003年まで本館展示の一部リニューアルなど
2004	平成16年	4月	国立大学法人法（平成15年法律第112号）の施行により、大学共同利用機関法人・人間文化研究機構が発足 4研究部、1研究施設を、現行の3研究部、2研究施設に改組 研究者コミュニティの代表を含む共同利用委員会による審査システム、公募の拡大など共同研究の体制を整備 本館の組織をあげて取り組む「機関研究」を開始
		6月	創設30周年記念事業として『国立民族学博物館三十年史』の編集を開始（平成18年3月刊行）
2006	平成18年	4月	民族学資料共同利用窓口を設置
2007	平成19年		開館30周年を迎え、記念行事を実施。11月に記念式典を挙行
2008	平成20年	2月	日本文化人類学会と連携事業に関する協定を締結
2009	平成21年	3月	西アジア、アフリカ展示場を新構築、一般公開
2010	平成22年	3月	音楽、言語展示場を新構築、一般公開
		4月	国際学術交流室の設置など新しい体制を整備
2011	平成23年	3月	オセアニア、アメリカ展示場を新構築、一般公開
2012	平成24年	3月	ヨーロッパ展示場、インフォメーション・ゾーンを新構築、一般公開
2013	平成25年	3月	東アジア（日本の文化「祭りと芸能」と「日々のくらし」）展示を新構築、一般公開
		4月	監査室、梅棹資料室を設置し、新しい体制を整備
2014	平成26年	3月	東アジア（朝鮮半島の文化、中国地域の文化、日本の文化「沖縄のくらし」と「多みんぞくニホン」）展示を新構築、一般公開

歴代館長 / 組織

歴代館長

平成26年4月1日現在

初代
梅棹忠夫（故人） 昭和49年6月―平成5年3月
民族学・比較文明論

第2代
佐々木高明（故人） 平成5年4月―平成9年3月
東・南アジア農耕文化史

第3代
石毛直道 平成9年4月―平成15年3月
文化人類学

第4代
松園万亀雄 平成15年4月―平成21年3月
社会人類学

第5代
須藤健一 平成21年4月―
社会人類学

運営組織

運営会議 平成26年4月1日現在

館長の要請により、本館の管理運営に関する重要事項について審議します。

植野弘子
東洋大学社会学部教授
栗田博之
東京外国語大学総合情報コラボレーションセンター長
栗本英世
大阪大学大学院人間科学研究科教授
建畠　哲
京都市立芸術大学長
富沢寿勇
静岡県立大学国際関係学部教授
松田　凡
京都文教大学総合社会学部教授
松田素二
京都大学大学院文学研究科教授
吉岡政徳
神戸大学大学院国際文化学研究科教授
渡邊欣雄
國學院大學文学部教授
池谷和信
国立民族学博物館民族文化研究部長
韓　敏
国立民族学博物館民族社会研究部長
岸上伸啓
国立民族学博物館副館長（研究・国際交流担当）・
国際学術交流室長
久保正敏
国立民族学博物館副館長（企画調整担当）・
情報管理施設長
佐々木史郎
国立民族学博物館先端人類科学研究部教授
（総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長）
塚田誠之
国立民族学博物館研究戦略センター長
寺田吉孝
国立民族学博物館先端人類科学研究部長
野林厚志
国立民族学博物館文化資源研究センター長

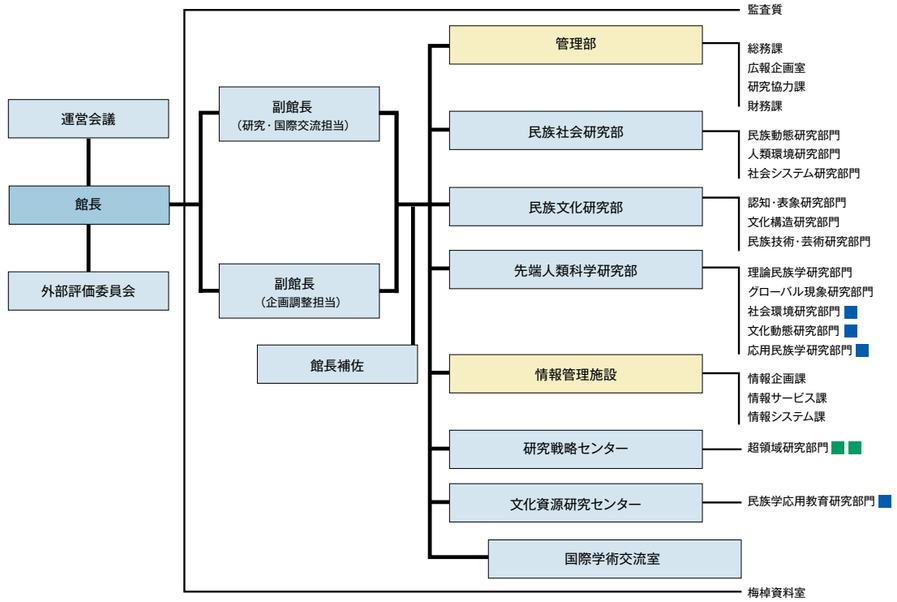
外部評価委員会 平成26年4月1日現在

館長の要請により、本館における研究教育活動等の状況に関する点検・評価について審議します。

安達　淳
国立情報学研究所副所長
黒柳俊之
独立行政法人国際協力機構理事
小泉潤二
大阪大学未来戦略機構第一部門特任教授
八村廣三郎
立命館大学情報理工学部教授
廣冨靖以
公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団理事長
堀井良殷
公益財団法人大阪21世紀協会理事長
宮田亮平
東京芸術大学長
三輪嘉六
国立文化財機構九州国立博物館長
山本真鳥
法政大学経済学部教授

組織構成図

平成26年4月1日現在



現員

平成26年4月1日現在

区分	館長	教授	准教授	助教	特任教授	小計	事務職員（技術職員含む）	合計
現員	1	25	23	7		56	48	104
客員（国内）		14	6			20		20
客員（国外）		3	2			5		5
館長	1					1		1
監査室							1	1
管理部							26	26
情報管理施設							21	21
研究部		15	14	3		32		32
研究戦略センター		5	3	3		11		11
文化資源研究センター		5	6	1		12		12

注）客員は外数

予算

平成25年度	単位：百万円
区分	
人件費	1,124
物件費	1,825
教育研究経費	1,139
一般管理費	581
施設費	105
計	2,949

注）補正後の予算額

平成26年度	単位：百万円
区分	
人件費	1,178
物件費	1,615
教育研究経費	811
一般管理費	723
施設費	81
計	2,793

注）年度計画予算額

評価

本館は、大学共同利用機関法人・人間文化研究機構の一員として文部科学大臣が進める6年間の中期目標に基づく中期計画及び年度計画を策定し、その実施状況について国立大学法人評価委員会の評価を受けています。
上記の評価のほか、本館独自で自己点検・評価を実施しており、本館の研究教育活動等の状況をまとめた「自己点検報告書」を作成しています。
また、外部評価委員会を設けており、委員の意見ならびに委員会の記録、「自己点検報告書」などの関係資料を教職員をはじめ関係者に広く知らしめるとともに、館運営の改善に活用しています。

施設

建設の基本構想

敷地全体が公園計画に調和するように、建物の高さを全体的にできる限り低くおさえ、伝統的な日本建築のもつ美の特色を活かしています。
平面計画は複数のブロックによって構成されており、それぞれのブロック外壁は原則として採光をおこなわないことになっていますが、
展示場の内側には採光が可能なパティオ(中庭)を設けています。
各パティオは、建築内部に屋外の環境を持ち込むばかりでなく、屋外展示スペースとしても利用することができます。
動線計画は、1階に収蔵、2階に展示、3･4階に研究の機能をまとめて配置し、エレベータ･階段で垂直に最短距離で結んでいます。
とくに展示のための観客の動線は、全体を詳細にみることも、一部分展示ブロックを簡略してみることも可能な回遊方式になっています。
また、ユニバーサル・ミュージアムをめざし、点字ブロックの設置などバリアフリー化をおこなっています。

施設の概要

敷地面積=40,821㎡
建築面積=18,177㎡
建築延床面積=52,648㎡

4階 7,207㎡
研究部門

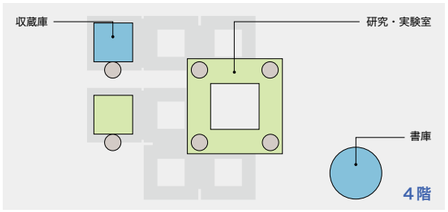
3階 中3、中4階を含む 7,340㎡
研究･図書･管理部門

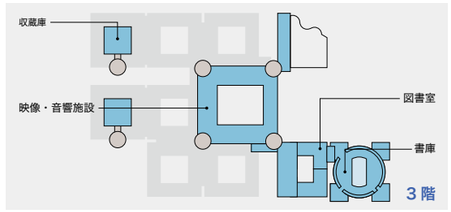
屋階 846㎡

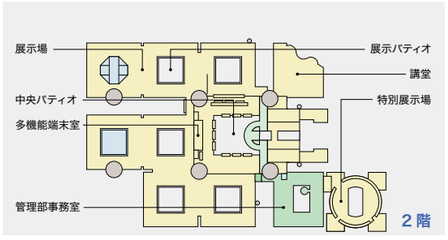
2階 中2階を含む 16,830㎡
展示･管理部門

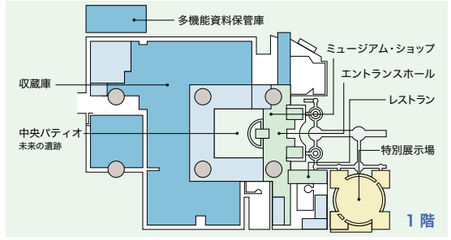
1階 多機能資料保管庫含む 17,410㎡
エントランス･収蔵･サービス部門

地階 3,015㎡









館員紹介 平成26年4月1日現在

館長
須藤健一（すどう けんいち）

監査室
室長(併)
武田良正（たけだよしまさ）
管理部長

管理部
部長
武田良正（たけだよしまさ）

総務課
課長
大西真一（おおにしししんいち）

課長補佐
松本勝昌（まつもとかつまさ）

広報企画室
室長(併)
大西真一（おおにしししんいち）
総務課長

室長補佐(併)
松本勝昌（まつもとかつまさ）
総務課課長補佐

研究協力課
課長
藤井修治（ふじいのぶはる）

課長補佐
北村俊哉（きたむらとしや）

財務課
課長
佐藤 淳（さとう じゅん）

課長補佐
吉岡 治（よしおか おさむ）

副館長(研究･国際交流担当)
岸上伸啓（きしがみのぶひろ）
研究戦略センター教授

副館長(企画調整担当)
久保正敏（くぼ まさとし）
文化資源研究センター教授

館長補佐
園田直子（そのだなおこ）
文化資源研究センター教授

情報管理施設
施設長(併)
久保正敏（くぼ まさとし）

情報企画課
課長
亀井耕治（かめいこうじ）

課長補佐
包国征治（かねくにせいじ）

情報サービス課
課長
石坂泰郎（いしざかやすお）

情報システム課
課長
吉見賢一（よしみけんいち）

課長補佐
今中弘幸（いまなかひろゆき）

専門員
中川 隆（なかがわ たかし）

民族社会研究部
部長
韓 敏（かん びん）

教授
朝倉敏夫（あさくらとしお）
韓国社会研究

印東道子（いんとうみちこ）
オセアニア考古学

韓 敏（かん びん）
社会人類学･中国研究

小長谷有紀（こながやゆき）(併)
牧畜文化論･モンゴル研究

庄司博史（しょうじひろし）
言語学･言語政策論

西尾哲夫（にしおてつお）
認識言語学･アラブ研究

准教授
宇田川妙子（うだがわたえこ）
南ヨーロッパ研究･性研究

太田心平（おおたしんぺい）
社会文化人類学･北東アジア研究

佐藤浩司（さとうこうじ）
民族建築学

MATTHEWS, Peter J.（マシウス ピーター）
先史学･民族植物学

三島禎子（みしまていこ）
文化人類学･西アフリカ研究

横山廣子（よこやまひろこ）
文化人類学･中国社会研究

助教
吉岡 乾（よしおか のぼる）
言語学･南アジア研究

民族文化研究部
部長
池谷和信（いけやかずのぶ）

教授
池谷和信（いけやかずのぶ）
環境人類学･南部アフリカ研究

笹原亮二（ささはらりょうじ）
民俗学･民俗芸能研究

杉本良男（すぎもとよしお）
社会人類学･南アジア研究

竹沢尚一郎（たけざわしょういちろう）
宗教人類学･西アフリカ研究

出口正之（でぐちまさゆき）
NPO･メセナ･フィランソロピー

森 明子（もり あきこ）
中部ヨーロッパ文化人類学

八杉佳穂（やすぎよしほ）
言語人類学･中米文化史

准教授
新免光比呂（しんめんみつひろ）
宗教学･東欧研究

鈴木 紀（すずき もとい）
開発人類学･ラテンアメリカ文化論

廣瀬浩二郎（ひろせこうじろう）
日本宗教史･民俗学

山中由里子（やまなかゆりこ）
比較文学･比較文化

助教
齋藤玲子（さいとうれいこ）
アイヌ･北方先住民文化研究

藤本透子（ふじもととうこ）
文化人類学･中央アジア地域研究

先端人類科学研究部

部長
寺田吉孝（てらだよしたか）

教授

齋藤　晃（さいとう　あきら）
ラテンアメリカ歴史人類学

佐々木史郎（ささきしろう）
文化人類学・北アジア研究

寺田吉孝（てらだよしたか）
民族音楽学・インド研究

准教授

飯田　卓（いいだ　たく）
生態人類学・漁民研究

菊澤律子（きくさわりつこ）
言語学・オーストロネシア諸語

松尾瑞穂（まつおみずほ）
文化人類学・南アジア研究

丸川雄三（まるかわゆうぞう）
連想情報学・文化財情報発信

研究戦略センター

センター長
塚田誠之（つかだしげゆき）

教授

岸上伸啓（きしがみのぶひろ）
文化人類学・北方文化研究

鈴木七美（すずきななみ）
医療人類学・医療社会史

關　雄二（せき　ゆうじ）
アンデス考古学・ラテンアメリカ研究

塚田誠之（つかだしげゆき）
歴史民族学・中国研究

平井京之介（ひらいきょうのすけ）
経済人類学・東南アジア研究

准教授

樫永真佐夫（かしながまさお）
東南アジア文化人類学

丹羽典生（にわのりお）
社会人類学・オセアニア地域研究

三尾　稔（みおみのる）
文化人類学・南アジア研究

助教

伊藤敦規（いとうあつのり）
社会人類学・アメリカ先住民研究

河合洋尚（かわいひろなお）
社会人類学・漢族研究

菅瀬晶子（すがせあきこ）
文化人類学・中東地域研究

文化資源研究センター

センター長
野林厚志（のばやしあつし）

教授

久保正敏（くぼまさとし）
民族情報学・
コンピュータ民族学・オーストラリア研究

園田直子（そのだなおこ）
保存科学

野林厚志（のばやしあつし）
民族考古学・台湾研究

信田敏宏（のぶたとしひろ）
社会人類学・東南アジア研究

吉田憲司（よしだけんじ）
博物館人類学・アフリカ研究

准教授

上羽陽子（うえばようこ）
民族芸術学・染織研究・手工芸研究

林　勲男（はやしいさお）
社会人類学・オセアニア研究

日高真吾（ひだかしんご）
保存科学

福岡正太（ふくおかしょうた）
民族音楽学・東南アジア研究

南　真木人（みなみまきと）
生態人類学・南アジア研究

山本泰則（やまもとやすのり）
博物館情報学

助教

川瀬　慈（かわせいつし）
映像人類学

国際学術交流室

室長（併）
岸上伸啓（きしがみのぶひろ）

（兼）

印東道子（いんとうみちこ）
民族社会研究部教授

菊澤律子（きくさわりつこ）
先端人類科学研究部准教授

齋藤　晃（さいとう　あきら）
先端人類科学研究部教授

MATTHEWS, Peter J.（マシウス　ピーター）
民族社会研究部准教授

山中由里子（やまなかゆりこ）
民族文化研究部准教授

横山廣子（よこやまひろこ）
民族社会研究部准教授

梅棹資料室

室長（併）
久保正敏（くぼまさとし）
文化資源研究センター教授

客員教員

先端人類科学研究部

文化動態研究部門

STIRK, Ian Christopher（スタークイアンクリストファー）
元大阪大学世界言語研究センター外国人教師
対照言語学の研究

応用民族学研究部門

中山京子（なかやまきょうこ）
帝京大学教育学部教授
文化人類学と教育をつなぐ国際理解教育

山内直樹（やまうちなおき）
山内編集事務所代表
広報誌のあり方に関する研究

文化資源研究センター

民族学応用教育研究部門

中村嘉志（なかむらよしゆき）
国士舘大学理工学部准教授
インタラクティブセンシングのアプローチによる学術資料の情報提供に関する方法論的研究

平井康之（ひらいやすゆき）
九州大学大学院芸術工学研究院准教授
博物館を中心とした公共空間におけるインクルーシブデザインの理論と方法に関る実践的研究

特別客員教員

先端人類科学研究部

社会環境研究部門

末成道男（すえなりみちお）
東洋大学アジア文化研究所客員研究員
東アジアにおける祖先祭祀の変動に関する人類学的研究

古谷嘉章（ふるやよしあき）
九州大学大学院比較社会文化研究院教授
現代社会における先史文化の物質性についての研究

森山　工（もりやまたくみ）
東京大学大学院総合文化研究科教授
葬送と遺体の「所有」に関する人類学的研究

文化動態研究部門

佐々木利和（ささきとしかず）
北海道大学アイヌ・先住民研究センター客員教授
民族学博物館におけるアイヌ文化展示の研究

山田孝子（やまだたかこ）
京都大学名誉教授
多文化空間におけるミクロ・リージョナル共同性構築・維持

陳　天璽（ちんてんじ）
早稲田大学国際教養学部准教授
アジアにおける移民と文化

応用民族学研究部門

市田泰弘（いちだやすひろ）
国立障害者リハビリテーションセンター学院
手話通訳学科主任教官
日本手話の特徴をふまえた手話言語学教授法に関する研究

清水郁郎（しみずいくろう）
芝浦工業大学工学部教授
東南アジアにおける木造建築の建設にかかわる比較研究

関本照夫（せきもとてるお）
東京大学名誉教授
布と人間の人類学的研究

曽我　亨（そがとおる）
弘前大学人文学部教授
東アフリカ牧畜社会における降雨変動と紛争頻度の関係

林　史樹（はやしふみき）
神田外語大学外国語学部教授
韓国食文化の人類学的研究

大杉　豊（おおすぎゆたか）
筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター准教授
手話言語学 に関する研究ネットワーク拠点の形成に向けての現状調査

高城　玲（たかぎりょう）
神奈川大学経営学部准教授
タイにおける社会運動の相互行為に関する人類学的研究

飯髙伸五（いいたかしんご）
高知県立大学文化学部講師
アジア・太平洋地域における日本統治の記憶と記録に関する歴史人類学的研究

文化資源研究センター

民族学応用教育研究部門

前川啓治（まえがわけいじ）
筑波大学大学院人文社会科学研究科教授
グローバリゼーションから視る組織文化の比較研究

外国人研究員

研究戦略センター

超領域研究部門

CHU Xuan Giao（チュスワンザオ）
ベトナム社会科学院文化研究所上席研究員（ベトナム）
平成26年7月1日～平成27年6月29日
ベトナムのヌン(Nung)族の社会変動と信仰に関する歴史人類学的研究

KANJOU, Youssef（カンジョウユーセフ）
アレッポ国立博物館館長（シリア）
平成26年3月17日～平成27年3月16日
戦争と博物館：戦火のもとの文化遺産の保護とコミュニティの再生

KHOSRONEJAD, Pedram（ホスローネジャードペドラム）
セント・アンドリューズ大学専任研究員（英国）
平成25年9月13日～平成26年9月11日
イランにおける信仰とジェンダーの表象―映像資料に見るシーア派儀礼

KIM Chang-ho（金　昌鎬）（キムチャンホ）
韓国国立民俗博物館学芸研究士（韓国）
平成26年7月1日～平成27年6月29日
Digital Signage技法を活用した博物館所蔵資料の情報サービス及びVirtual Museum 改善方案の研究

NARENGERILE（娜仁格日勒）（ナランゲレル）
内モンゴル大学外国語学院教授（中国）
平成26年4月3日～平成27年3月31日
東スニト旗の社会変容：1944 ～ 2014年―梅棹資料を手掛かりに

OSTAPIRAT, Weera（オスタピラトウィーラ）
マヒドール大学アジア言語文化研究所准教授（タイ）
平成25年6月18日～平成26年6月17日
クラ・ダイ祖語の語彙再建とオーストロ・タイ（クラ・ダイとオーストロネシア）系民族の歴史

STRATHERN, Andrew Jamieson（ストラサーンアンドリュージェイミソン）
ピッツバーグ大学A.W. メロン特別教授（米国）
平成26年4月1日～平成26年6月30日
自然災害とその後－被災者はいかに対応し、希望をもつか―

WILDE SALMORAL, Guillermo Luis（ウィルデサルモラルギジェルモルイス）
国立サンマルティン大学社会科学高等研究所准教授（アルゼンチン）
平成27年1月16日～平成28年1月14日
ラテンアメリカとアジアにおけるキリスト教宣教と文化適応の比較研究

YONENO-REYES, Michiyo（米野みちよ）（ヨネノミチヨ）
フィリピン大学アジアセンター准教授（フィリピン）
平成26年4月1日～平成26年6月30日
民博映像番組の有効利用に関する研究

※平成26年度在籍または招聘予定（26年4月1日現在）の者。
　アルファベット順。

機関研究員

加賀谷真梨（かがやまり）
民族学・文化人類学の研究動向の調査研究

金田純平（かねだじゅんぺい）
国立民族学博物館における来館者に向けた学術コンテンツの作成と公開に関わる実証的研究

呉屋淳子（ごやじゅんこ）
博物館機能を活用した文化人類学・民族学に関する教育プログラムの開発ならびに実践的研究

末森　薫（すえもりかおる）
国立民族学博物館における文化資源の保存・管理システムの構築に関わる実証的研究

浜田明範（はまだあきのり）
民族学・文化人類学の研究動向の調査研究

山本　睦（やまもとあつし）
競争的資金に基づく研究プロジェクトの支援

吉田ゆか子（よしだゆかこ）
民族学・文化人類学の研究動向の調査研究

機関研究

機関研究は、個人でおこなうのがむずかしい規模の大きな課題、周辺諸分野にまたがる学際的な課題、ひろく人文社会科学に共通する重要な基礎的課題について、本館の組織をあげて取り組む研究です。そこでは、文化人類学・民族学の研究センターとしての特性を生かし、また文化人類学・民族学に対する社会的要請にこたえるため、従来の研究分野を基礎にしながら、先進的な課題をとりあげた各種プロジェクトが組織されています。機関研究は、本館の研究戦略を具体的に実現し、その成果を社会に還元するための重要な役割を負っているとともに、これらの研究プロジェクトを通じて、文化人類学・民族学および広く関連諸分野の発展に寄与し、さらには人文社会科学の再編や新しい分野の創出に貢献することが期待されます。

法人第二期の中期計画期間の機関研究は、国際性と機関間連携を重視した重点型の国際共同研究として位置づけられることになりました。平成21年度の後半から「包摂と自律の人間学」、「マテリアリティの人間学」の2つの領域を設定し、研究プロジェクトを立ち上げました。前者は人と人の関係に、後者は人とモノの関係に研究の焦点をあて、あらたな人間観を創出することをめざします。そして、錯綜する現在的課題をターゲットにして新たな人文・社会科学を展開していくために、関連諸分野との協力による創成的な研究を進めます。平成25年度の研究は、以下のとおりです。

1　包摂と自律の人間学　領域代表：塚田誠之

プロジェクトリーダー	プロジェクト名
齋藤　晃	近代ヒスパニック世界における国家・共同体・アイデンティティ―スペイン領アメリカの集住政策の研究
鈴木七美	ケアと育みの人類学
韓　敏	中国における家族・民族・国家のディスコース

2　マテリアリティの人間学　領域代表：寺田吉孝

プロジェクトリーダー	プロジェクト名
佐々木史郎	民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究―ロシア民族学博物館との国際共同研究
菊澤律子	手話言語と音声言語の比較に基づく新しい言語観の創生
飯田　卓	文化遺産の人類学―グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ

平成25年度に実施された機関研究関連のシンポジウム・研究フォーラム

※開催場所の表記がないものは本館で実施。外国語表記のあるものは国際研究集会。

1　包摂と自律の人間学

公開セミナー
「トレドの集住政策研究の新展開」
"New Advances in the Study of Toledo's Resettlement Policy"

開催場所　教皇庁立ペルーカトリカ大学（ペルー）
実施日　平成25年10月24日
研究代表者　齋藤　晃

国際シンポジウム
「社会運動と知の生産―東アジアにおける政治・アイデンティティ・社会変化」
"Social Movements and the Production of Knowledge: Politics, Identity and Social Change in East Asia"
実施日　平成26年2月22日～23日
研究代表者　鈴木七美
実行委員長　平井京之介

国際シンポジウム「社会運動と知の生産―東アジアにおける政治・アイデンティティ・社会変化」

国際シンポジウム
「中日の人類学・民族学の理論的刷新とフィールドワークの展開」
"Theoretical Challenges of Anthropology and Ethnology in China and Japan"
開催場所　社会科学院民族学・人類学研究所（中国）
実施日　平成25年11月18日～19日
研究代表者　韓　敏

国際シンポジウム「中日の人類学・民族学の理論的刷新とフィールドワークの展開」

2　マテリアリティの人間学

国際ワークショップ
「民族学資料の記録化・情報化の諸問題」
"Documentation and Database of Ethnological Materials"
開催場所　ロシア民族学博物館、ノヴゴロド野外博物館、ヴィトスラヴィツィ民俗木造建築博物館（ロシア）
実施日　平成25年9月23日～27日
研究代表者　佐々木史郎

国際シンポジウム
「博物館コレクションの中のシベリア、極東諸民族の文化―収集、保存、展示方法の検討」
"Culture of the Peoples of Siberia and the Russian Far East in Museum Collections: Methods of Collection, Preservation and Exhibition"
実施日　平成25年10月13日～14日
研究代表者　佐々木史郎

国際ワークショップ
「コンピュータとドキュメンテーション―民族学資料のデジタル化とその利用」
"Computers and Documentation: Establishment and Use of Digital Data on Ethnological Materials"
実施日　平成26年3月3日～7日
研究代表者　佐々木史郎

国際ワークショップ「コンピュータとドキュメンテーション―民族学資料のデジタル化とその利用」

国際ワークショップ
「語順に関する国際ワークショップ」
"International Workshop on Word Order"
実施日　平成25年9月27日
研究代表者　菊澤律子

国際ワークショップ
「言語の記述に関する国際ワークショップ」
"International Workshop on Language Documentation"
実施日　平成25年9月28日
研究代表者　菊澤律子

国際シンポジウム
第2回手話言語学と音声言語学に関する国際シンポジウム（SSLL2）「言語の語順と文構造」
"Second International Symposium on Signed and Spoken Language and Linguistics (SSLL2) Sentence Structures in Languages / Body Expressions"
実施日　平成25年9月29日
研究代表者　菊澤律子

国際シンポジウム「言語の語順と文構造」

みんぱくセミナー
暮らしの中の言語学「ことばの機能障害と言語学」
Linguistics in Daily Life "Language Disorders and Linguistics"
開催場所実　日本財団ホール（東京）
実施日　平成25年12月1日
研究代表者　菊澤律子

国際シンポジウム
「文化遺産はコミュニティをかたどるか？―アフリカの事例から」
"Can Cultural Heritage Forge Communities? Efforts in Africa"
実施日　平成25年5月27日～28日
研究代表者　飯田　卓

国際ワークショップ
「武器をアートに―モザンビークにおける平和構築の営みを考える」
"Transforming Arms into Art: Reviewing the Peace-building Project in Mozambique"
実施日　平成25年7月13日
研究代表者　飯田　卓
実行委員長　吉田憲司

公開フォーラム
「負の文化遺産の保存と展示をめぐって」
"Preserving and Exhibiting Negative Heritage"
開催場所　千里朝日阪急ビル（大阪）
実施日　平成26年1月18日
研究代表者　飯田　卓
実行委員長　竹沢尚一郎

共同研究

文化人類学・民族学および関連分野の特定のテーマについて館内外の専門家が共同でおこなう研究です。
平成25年度は、館外より国立大学など208名、公立大学34名、私立大学190名、民間機関など86名の専門家とともに研究をおこないました(平成26年3月現在)。

平成25年度　共同研究課題

○印は公募による実施課題、□印は特別客員教員(申請時)による実施課題

【一般】

研究代表者	研究課題	研究期間	共同研究員数 館内	国立大学	公立大学	私立大学	民間機関など	計
	課題1：文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究							
川瀬　慈	映像民族誌のナラティブの革新	平成25年10月1日 ～平成28年3月31日	1	4	0	3	2	10
○ 窪田幸子	表象のポリティックス―グローバル世界における先住民／少数者を焦点に	平成25年10月1日 ～平成29年3月31日	5	10	0	2	4	21
○ 杉島敬志	エージェンシーの定立と作用―コミュニケーションから構想する次世代人類学の展望	平成25年10月1日 ～平成29年3月31日	1	9	1	1	0	12
杉本良男	聖地の政治経済学―ユーラシア地域大国における比較研究	平成25年10月1日 ～平成29年3月31日	3	5	0	1	2	11
○ 長谷千代子	宗教人類学の再創造―滲出する宗教性と現代世界	平成25年10月1日 ～平成29年3月31日	2	5	3	4	1	15
○ 福岡まどか	東南アジアのポピュラーカルチャー―アイデンティティ、国家、グローバル化	平成25年10月1日 ～平成29年3月31日	2	5	1	2	1	11
○ 吉江貴文	近代ヒスパニック世界における文書ネットワーク・システムの成立と展開	平成25年10月1日 ～平成29年3月31日	1	4	1	7	0	13
池谷和信	熱帯の「狩猟採集民」に関する環境史的研究―アジア・アフリカ・南アメリカの比較から	平成24年10月1日 ～平成27年3月31日	2	11	1	4	7	25
○ 小野林太郎	アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類史的研究―資源利用と物質文化の時空間比較	平成24年10月1日 ～平成28年3月31日	2	2	1	5	3	13
岸上伸啓	贈与論再考―「贈与」・「交換」・「分配」に関する学際的比較研究	平成24年10月1日 ～平成27年3月31日	4	4	3	9	1	21
○ 土佐桂子	「統制」と公共性の人類学的研究―ミャンマーにおけるモノ・情報・コミュニティ	平成24年10月1日 ～平成28年3月31日	1	5	2	2	3	13
野林厚志	肉食行為の研究	平成24年10月1日 ～平成27年3月31日	3	8	0	3	3	17
廣瀬浩二郎	触文化に関する人類学的研究―博物館を活用した“手学問”理論の構築	平成24年10月1日 ～平成27年3月31日	1	3	0	4	7	15
○ 橋本裕之	災害復興における在来知―無形文化の再生と記憶の継承	平成24年4月1日 ～平成27年3月31日	3	3	0	7	4	17
菅瀬晶子	パレスチナ・ナショナリズムとシオニズムの交差点	平成23年10月1日 ～平成27年3月31日	1	4	0	7	3	15
□ 関根久雄	実践と感情―開発人類学の新展開	平成23年10月1日 ～平成26年3月31日	3	6	2	4	2	17
○ 関根康正	ストリート・ウィズダムとローカリティの創出に関する人類学的研究	平成23年10月1日 ～平成27年3月31日	1	3	1	11	5	21
陳　天璽	人の移動と身分証明の人類学	平成23年10月1日 ～平成27年3月31日	2	8	0	12	6	28
○ 名和克郎	ネパールにおける「包摂」をめぐる言説と社会動態に関する比較民族誌的研究	平成23年10月1日 ～平成27年3月31日	1	9	1	7	3	21
信田敏宏	NGO活動の現場に関する人類学的研究―グローバル支援の時代における新たな関係性への視座	平成23年10月1日 ～平成27年3月31日	3	8	1	4	1	17
□ 古谷嘉章	物質性の人類学（物性・感覚性・存在論を焦点として）	平成23年10月1日 ～平成27年3月31日	2	8	0	2	1	13
○ 松川恭子	グローバリゼーションの中で変容する南アジア芸能の人類学的研究	平成23年10月1日 ～平成27年3月31日	2	6	0	6	0	14
○ 道信良子	現代の保健・医療・福祉の現場における「子どものいのち」	平成23年10月1日 ～平成27年3月31日	1	3	4	1	4	13
○ 川田順造	日本の「近代化」をアジア・アフリカ諸社会との比較で再検討する	平成22年10月1日 ～平成26年3月31日	3	9	0	5	0	17
○ 桑山敬己	海外における人類学的日本研究の総合的分析	平成22年10月1日 ～平成26年3月31日	1	7	0	7	1	16
□ 小池　誠	人類学における家族研究の新たなる可能性	平成22年10月1日 ～平成26年3月31日	2	4	2	6	0	14
庄司博史	日本の移民コミュニティと移民言語	平成22年10月1日 ～平成26年3月31日	1	3	1	12	2	19
○ 堀内正樹	非境界型世界の研究―中東的な人間関係のしくみ	平成22年10月1日 ～平成26年3月31日	1	6	1	6	2	16
山中由里子	驚異譚にみる文化交流の諸相―中東・ヨーロッパを中心に–	平成22年10月1日 ～平成26年3月31日	2	6	0	5	3	16
吉本　忍	手織機と織物の通文化的研究	平成22年10月1日 ～平成26年3月31日	2	0	2	6	2	12
伊藤敦規	米国本土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究	平成25年10月1日 ～平成29年3月31日	2	1	1	8	2	14
齋藤玲子	明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動―国立民族学博物館所蔵のアイヌ、ウイルタ、ニヴフ資料の再検討	平成24年10月1日 ～平成28年3月31日	2	4	0	4	2	12
小長谷有紀	梅棹忠夫モンゴル研究資料の学術的利用	平成23年10月1日 ～平成26年3月31日	1	3	0	0	3	7
○ 劉　麟玉	音盤を通してみる声の近代―台湾・上海・日本で発売されたレコードの比較研究を中心に	平成23年10月1日 ～平成27年3月31日	2	5	1	4	1	13
		計	66	181	30	171	81	529

【若手】

研究代表者	研究課題	研究期間	共同研究員数 館内	国立大学	公立大学	私立大学	民間機関など	計
	課題1：文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究							
○ 石森大知	宗教の開発実践と公共性に関する人類学的研究	平成25年10月1日 ～平成28年3月31日	1	2	0	5	1	9
○ 浜田明範	再分配を通じた集団の生成に関する比較民族誌的研究―手続きと多層性に注目して	平成25年10月1日 ～平成28年3月31日	3	5	0	2	0	10
○ 小川さやか	現代消費文化に関する人類学的研究―モノの価値の変化にみるグローバル化の多元性に着目して	平成24年10月1日 ～平成27年3月31日	0	5	0	2	2	9
○ 河合洋尚	ランドスケープの人類学的研究―視覚化と身体化の視点から	平成24年10月1日 ～平成27年3月31日	1	4	0	3	2	10
○ 津田浩司	「国家英雄」から見るインドネシアの地方と民族の生成と再生	平成24年10月1日 ～平成27年3月31日	0	8	1	4	0	13
○ 奈倉京子	帰還移民の比較民族誌的研究―帰還・故郷をめぐる概念と生活世界	平成23年10月1日 ～平成26年3月31日	0	3	3	3	0	9
		計	5	27	4	19	5	60
		合計	71	208	34	190	86	589

共同研究会の公開

平成16年度より共同研究会の一部が、一般向けに公開されております。平成25年度実績は以下のとおりです。

開催日	研究会名	場所
平成25年4月14日(日)	「統制」と公共性の人類学的研究―ミャンマーにおけるモノ・情報・コミュニティ	国立民族学博物館　第4セミナー室
平成25年6月14日(金)	人の移動と身分証明の人類学	青森県立郷土館
平成25年6月15日(土)	人の移動と身分証明の人類学	青森大学
平成25年6月16日(日)	人の移動と身分証明の人類学	雪中行軍記念館
平成25年6月22日(土)	現代の保健・医療・福祉の現場における「子どものいのち」	札幌医科大学記念ホール
平成25年11月10日(日)	アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類史的研究 ―資源利用と物質文化の時空間比較	大濱信泉記念館　多目的ホール
平成26年2月9日(日)	人の移動と身分証明の人類学	長崎大学　総合研究棟
平成26年2月11日(火)	日本の「近代化」をアジア・アフリカ諸社会との比較で再検討する	国立民族学博物館　第6セミナー室
平成26年3月1日(土)	日本の「近代化」をアジア・アフリカ諸社会との比較で再検討する	国立民族学博物館　第6セミナー室
平成26年3月3日(月)	音盤を通してみる声の近代―台湾・上海・日本で発売されたレコードの比較研究を中心に	国立民族学博物館　第6セミナー室

各個研究

平成26年度各個研究課題

館長

須藤健一　オセアニアの海面利用と資源保護の慣行に関する人類学的研究

民族社会研究部

朝倉敏夫　「食」の文化人類学
印東道子　島嶼環境への人類の移動と適応
宇田川妙子　公共性と親密性の再検討と再編
太田心平　韓国・朝鮮における社会文化の統合性と多様性
韓　敏　革命、改革とグローバル化のもとの中国に関する人類学的研究
小長谷有紀(併)　モンゴルにおける社会主義的近代化
佐藤浩司　東南アジア木造建築史の再構築
庄司博史　日本の多民族化・多言語化の実態についての研究
西尾哲夫　アラブ世界の言語社会的位相と文学伝統の変容
MATTHEWS, Peter J.　辺境少数民族地帯での植物利用及び伝統知の遺存と地域発展活動や国際経済の影響評価
三島禎子　アフリカ商業民の財の形成と継承に関する文化人類学的研究
横山廣子　中国雲南省とその隣接地域における文化・社会とアイデンティティ
吉岡　乾　北パキスタン諸言語の記述言語学的研究

民族文化研究部

池谷和信　狩猟採集民の定住化に関する研究
齋藤玲子　アイヌ文化の継承と社会的背景の研究
笹原亮二　日本の祭と民俗芸能における装飾性の諸相
新免光比呂　ルーマニアと日本におけるファシズム運動の比較研究
杉本良男　キリスト教文明と南アジア・ナショナリズム
鈴木　紀　国際開発のための実践人類学
竹沢尚一郎　西アフリカ史研究
被災のコミュニティ研究
出口正之　NPO・NGOに関する総合的研究
廣瀬浩二郎　「バリア・フリー」に関する人類学的研究
藤本透子　中央アジアにおける社会再編とイスラームに関する人類学的研究
―カザフスタンの事例を中心として
森　明子　人類学的比較の再考
八杉佳穂　カクチケル語とユカテク語の文献言語学的研究
山中由里子　中東およびヨーロッパにおける驚異譚の比較文学的研究

先端人類科学研究部

飯田　卓　南西諸島の火薬漁に関する研究
菊澤律子　オーストロネシア諸語の比較形態統語論的研究
―動詞の形態法の発達史を探る
齋藤　晃　スペイン領南米における集住政策の先住民社会への影響
佐々木史郎　極東ロシア、日本列島北部における近世から近代への転換
寺田吉孝　音楽・芸能の伝承における映像メディアの活用
松尾瑞穂　インドにおけるリプロダクションとサブスタンスに関する研究
丸川雄三　連想情報学に基づく文化財情報発信に関する研究

研究戦略センター

伊藤敦規　日本国内博物館等所蔵アメリカ南西部先住民資料の協働管理に向けた調査研究
樫永真佐夫　ベトナムにおける黒タイ文字と文書
東南アジアにおけるボクシングの文化人類学
河合洋尚　中国漢族地域の都市景観形成にまつわる人類学的研究
環太平洋における客家の移動、文化再生、景観形成にまつわる越境民族誌
漢族の人類学的研究にまつわる先行研究の整理
岸上伸啓　北アメリカ地域における先住民による捕鯨に関する文化人類学的研究
菅瀬晶子　東地中海アラブ諸国における宗教的アイデンティティの表象
鈴木七美　エイジフレンドリー・コミュニティと文化的資源
關　雄二　古代アンデスにおける権力生成過程の研究
塚田誠之　中国南部・広西におけるチワン族の歴史の資源化に関する研究
丹羽典生　応援の人類学：政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の諸相
平井京之介　水俣病被害者支援運動の人類学的研究
三尾　稔　インド西部における宗教と文化の変容に関する人類学的研究

文化資源研究センター

上羽陽子　現代インドの手工芸文化に関する民族芸術学的研究
川瀬　慈　民族誌映画のナラティブの革新
久保正敏　映像アーカイブズ構築のための諸課題の検討と指針策定
―倫理・知的財産権・保存と利用の両立を目指して
園田直子　大型民族資料を対象とした環境に「やさしい」殺虫処理法の使い分け
野林厚志　台湾原住民族の工芸生産とエスニシティとの関係に関わる人類学的研究
信田敏宏　マレーシアの先住民コミュニティに関する民族誌的研究
林　勲男　災害と記憶
日髙真吾　文化遺産の復興に向けたミュージアムの活用のための基礎的研究
―大学共同利用機関の視点から
福岡正太　音楽芸能研究における映像音響メディア
南真木人　在留ネパール人の移住システムとネットワークに関する研究
山本泰則　機械学習をもちいた民族学情報の検索
吉田憲司　文化の創造・継承と表象に関する博物館人類学的研究

外来研究員　平成25年度

本館では、国内外の研究者を外来研究員として受け入れています。平成25年度は、14の国・地域からの28人の外国籍の研究者を含む、115人の研究者を受け入れました。

特別共同利用研究員　平成25年度

本館は、大学共同利用機関として全国の国公私立大学の博士後期課程に在籍する学生を、当該学生の所属する大学院研究科からの委託を受けて特別共同利用研究員として受け入れています。特別共同利用研究員は、各々の特定の研究課題に応じて、本館の指導教員から研究指導を受け、本館の諸施設を利用し研究を遂行するとともに、本館に設置されている、総合研究大学院大学文化科学研究科(地域文化学専攻・比較文化学専攻)の教育プログラムに一部参加することができます。平成25年度は、国立大学より1名、私立大学より2名、計3名受け入れました。

受託研究　平成25年度

研究代表者	委託者	研究課題	研究費(千円)
園田直子	日本学術振興会(研究拠点形成事業 B.アジア・アフリカ学術基盤形成型)	アジアにおける新しい博物館・博物館学創出のための研究交流	5,830
竹沢尚一郎	三井物産(三井物産株式会社環境基金)	被災の共同体から地域の復興へ―被災後の人びとの行動の記録化とそれに基づく新たな社会モデルの構築	2,324
菊澤律子	日本財団	手話言語学に関する講義の実施およびシンポジウム・セミナーの開催	15,000
笹原亮二 福岡正太	天城町文化財活性化実行委員会	天城町伝統芸能映像記録作成事業	980
野村厚志	台湾文化部	台湾文化光点計画―博物館で台湾を学ぶ	4,631

計5件　28,765

寄附金　平成25年度

寄附金の名称	研究代表者	寄附者	受入額(千円)
「渋沢敬三没後50周年記念特別展」運営助成金	近藤雅樹	一般財団法人MRAハウス	250
吉田ゆか子機関研究員研究助成金	吉田ゆか子	公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団	730
「アジア歴史研究」助成金	出水　力	JFE21世紀財団	1,500
順益台湾原住民博物館研究賛助金	野林厚志	順益台湾原住民博物館	4,000
公益財団法人髙梨学術奨励基金	中村真里絵	公益財団法人髙梨学術奨励基金	300
「渋沢敬三記念事業」運営助成金	朝倉敏夫	一般財団法人MRAハウス	7,800
台湾平埔族の歴史と文化展に係る研究助成	野林厚志	日本たばこ産業株式会社	280
若手研究者を支援する研究助成	市川　彰	株式会社パレオ・ラボ	150
企画展・国際連携展示「台湾平埔族の歴史と文化」運営助成金	野林厚志	台北駐日経済文化代表処	100

計9件　15,110

科学研究費補助金

科学研究費補助金は、我が国の学術を振興するため、人文・社会科学から自然科学まであらゆる分野における優れた独創的・先駆的な研究を格段に発展させることを目的とする研究助成費で、大学などの研究者または研究者グループが自発的に計画する基礎的研究のうち、学術研究の動向に即して特に重要なものを取り上げ、研究費の助成をするものです。

平成26年度採択課題

研究種目	研究代表者	研究課題	配分額(千円)
継続　基盤研究(S)	關　雄二	権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築	35,490
		計1件	35,490
継続　基盤研究(A)	西尾哲夫	アラブ世界の都市部中流層文化とアラビアンナイト－エジプト系伝承形成の謎を解く	9,620
継続　基盤研究(A)	竹沢尚一郎	世界の中のアフリカ史の再構築	11,700
継続　基盤研究(A)	山本紀夫	熱帯高地における環境開発の地域間比較研究―「高地文明」の発見に向けて	8,450
新規　基盤研究(A)	池谷和信	熱帯の牧畜における生産と流通に関する政治生態学的研究	9,100
		計4件	38,870
継続　基盤研究(B)	山中由里子	中東およびヨーロッパにおける驚異譚の比較文学的研究	3,640
継続　基盤研究(B)	辻　輝之	宗教と移民のアイデンティティ・共生：南アジア系ディアスポラを事例として	910
継続　基盤研究(B)	園田直子	劣化の進んだ図書・文書資料の長期保存に向けた大量強化法の開発	5,070
継続　基盤研究(B)	福岡正太	映像を用いた東南アジアのゴング文化の音楽人類学的研究	4,550
継続　基盤研究(B)	杉本良男	経済自由化後の南インド社会の構造変動に関する総合的研究	5,460
新規　基盤研究(B)	丸川雄三	ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合	7,670
新規　基盤研究(B)	野林厚志	台湾原住民族の分類とアイデンティティの可変性に関する人類学的研究	3,380
新規　基盤研究(B)	佐々木史郎	北方寒冷地域における織布技術と布の機能	5,200
		計8件	35,880
継続　基盤研究(C)	笹原亮二	瀬戸内海及び西日本における多島海世界の民俗芸能の研究	1,300
継続　基盤研究(C)	松岡葉月	博物館における全天周科学映像の開発および評価に関する人文・社会学的研究	130
継続　基盤研究(C)	平井京之介	水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究	1,820
継続　基盤研究(C)	丹羽典生	トランスナショナルな社会運動と政治参加の人類学：オセアニア大国の移民を事例に	1,300
継続　基盤研究(C)	飯田　卓	バイパス型私企業活動の活性化による、マダガスカル山間部の住民行動と地域構造の変容	910
継続　基盤研究(C)	鈴木七美	スイスにおける高齢者のウェルビーイングと代替医療の適用に関する文化人類学研究	1,430
継続　基盤研究(C)	西本　太	近代化とラオス農村社会の再生産戦略：1975-2012	1,560
新規　基盤研究(C)	金谷美和	インド災害後のローカル文化再編におけるコミュニティ資源としての「手工芸」の意義	1,170
新規　基盤研究(C)	上羽陽子	現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術学的研究	2,210
新規　基盤研究(C)	宇田川妙子	現代イタリア社会におけるローカリティに関する文化人類学的研究	1,300
		計10件	13,130
新規　若手研究(A)	山本　睦	神殿をめぐる活動と地域間交流の相関からみたアンデス文明形成期の社会動態	1,820
新規　若手研究(A)	伊藤敦規	日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究	5,980
		計2件	7,800
継続　若手研究(B)	相島葉月	現代エジプトのオルタナティヴ・モダニティとしての空手実践に関する社会人類学的研究	1,170
継続　若手研究(B)	鈴木博之	言語多様性の記述を通して見る中国雲南省チベット語の方言形成の研究	910
継続　若手研究(B)	河合洋尚	漢族的特色の空間利用とエスニシティの再編―中・越隣接エリアの調査研究	1,040
継続　若手研究(B)	川瀬　慈	アフリカの無形文化保護における民族誌映画の活用	650
継続　若手研究(B)	加賀谷真梨	高齢者介護と相続の相関にみる沖縄の「家族」に関する人類学的研究	1,430
継続　若手研究(B)	太田心平	博物館展示の再編過程の国際比較による「真正な文化」の生成メカニズムの解明	1,040
新規　若手研究(B)	宮本万里	現代ブータンの多元的宗教空間における仏教と屠畜に関する政治人類学的研究	1,300
新規　若手研究(B)	岡本尚子	『千一夜物語』仏語訳者マルドリュス再考―＜遺贈コレクション＞の分析を中心に	1,430
新規　若手研究(B)	栗田梨津子	オーストラリア多文化主義下の先住民とスーダン難民の緊張関係をめぐる人類学的研究	910
新規　若手研究(B)	呉屋淳子	境界領域における民俗芸能の教授・創生に関する研究：奄美諸島の高等学校を中心に	1,430
新規　若手研究(B)	豊山亜希	植民地インドにおける商業カーストの邸宅建築に関する基礎的研究	1,430
		計11件	12,740
継続　挑戦的萌芽研究	久保正敏	動的共創型デジタルアーカイブズ構築―梅棹忠夫資料に基づいて	1,820
新規　挑戦的萌芽研究	岩谷洋史	人類学におけるフォト・エスノグラフィーの手法の探求	2,340
		計2件	4,160
継続　研究活動スタート支援	猪股(松井)智子	女性移民・人身売買被害者支援運動の変容とその多元的リアリティの解明：タイを事例に	910
継続　研究活動スタート支援	浜田明範	西アフリカにおける生権力の複数性：ガーナ南部における結核対策を事例に	1,170
継続　研究活動スタート支援	吉田ゆか子	モノからみる芸能文化のグローバル化―バリの仮面と楽器を事例として	1,170
継続　研究活動スタート支援	近藤　宏	気候変動の政治経済と中南米低地先住民の所有実践	1,170
		計4件	4,420
新規　研究成果公開促進費(学術図書)	浜田明範	薬剤と健康保険の人類学	1,200
新規　研究成果公開促進費(学術図書)	竹村嘉晃	神霊を生きること、その世界	1,600
新規　研究成果公開促進費(学術図書)	大場千景	Oral Chronicles of Boorana in Southern Ethiopia	4,600
継続　研究成果公開促進費(データベース)	久保正敏	梅棹忠夫資料のデジタルアーカイブズ	5,100
		計4件	12,500
継続　特別研究員奨励費	市川　彰	紀元後5世紀イロパンゴ火山噴火前後のメソアメリカ太平洋沿岸部の生業と社会の研究	1,690
継続　特別研究員奨励費	比嘉夏子	社会空間の動態と行為の演劇性をめぐる人類学的研究―ポリネシアにおける贈与の全体性	1,560
継続　特別研究員奨励費	田中鉄也	近現代インドにおけるヒンドゥー寺院運営の意義―商業集団マールワーリーを事例として	650
継続　特別研究員奨励費	松嶋　健	社会的なるものの生態学―イタリアの社会協同組合を軸とした統治と連帯の人類学的研究	1,430
継続　特別研究員奨励費	奈良雅史	宗教と公共性をめぐる人類学的研究―現代中国におけるイスラーム復興運動の事例から―	1,560
継続　特別研究員奨励費(外国人特別研究員)	鈴木七美／CAIJILAHU	内モンゴルにおけるシャマニズムと民間医療に関する文化人類学的研究	400
		計6件	7,290
		総計	172,280

研究成果の公開 ※開催場所の表記がないものは、本館で開催。外国語表記があるものは、国際研究集会。

本館では、館長リーダーシップ経費「研究成果公開プログラム」をはじめ、シンポジウムや研究フォーラム、国際研究集会への派遣など、研究成果の公開を積極的に支援しています。その他の外部資金等を含め、平成25年度は下記のような成果公開を実施しました。なお、機関研究関連については、10～11頁に掲載しています。

学術講演会

先端的な研究活動を取りあげ、その成果を社会に積極的に還元するとともに、文化人類学・民族学を通じての異文化理解と、広く本館が学術研究機関であることの認識を一般市民に深めてもらうことを目的として、東京と大阪において学術講演会を実施しています。

みんぱく公開講演会
ミャンマー　刻んだ歴史 未来へのまなざし
平成25年10月25日(金)18:30～20:40

開催場所　日経ホール(東京)
講師　田村克己、伊野憲治、土佐桂子
司会　三尾　稔
参加総数　427名
共催　日本経済新聞社

みんぱく公開講演会
働き者と、ナマケモノ!?―「はたらきかた」文化論
平成26年3月20日(木)18:30～20:45

開催場所　オーバルホール(大阪)
講師　庄司博史、若林良和、平井京之介
司会　樫永真佐夫
参加総数　303名
共催　毎日新聞社

シンポジウム

公開シンポジウム
「渋沢敬三を語る―偉大なる学問の庇護者」 “Shibusawa Keizo -The Great Patron of Learning”
平成25年10月13日
代表者　久保正敏

国際シンポジウム
「北太平洋沿岸諸文化の比較研究: 先住権と海洋資源の利用を中心に」 "Comparative Studies of Indigenous Cultures around the North Pacific Rim: Focusing on Indigenous Rights and Marine Resource Utilization”
平成26年1月11日～13日
代表者　岸上伸啓

国際シンポジウム
「ペルー南海岸における社会の実態と変容」 “Desarrollo y Cambio Social de las Sociedades Prehispánicas en la Costa Sur del Perú”
平成26年2月16日
代表者　關　雄二

国際シンポジウム
「個人・家族・国家のゆくえ―文化人類学と人口学からの学際的アプローチ」 “The Future of Individuals, Family and State: Perspectives from Anthropology and Demography”
平成26年3月1日～2日
代表者　三島禎子

公開シンポジウム
「片倉もとこ先生をフィールド・ワークする」 “Fieldwork on Prof. Motoko Katakura”
平成26年3月29日
代表者　岸上伸啓・中牧弘允

公開シンポジウム
「伝統と創意―台湾における原住民族工芸」 “Tradition and Ingenuity: Craftwork of Taiwan’s Indigenous Peoples”
平成26年3月30日
代表者　野林厚志

研究フォーラム等

国際研究フォーラム
「金融のなかの贈与―金融と人類学の交差点」 “The Gift in Finance: Intersections of Finance and Anthropology”
平成25年7月14日
代表者　丹羽典生
実行委員長　宮崎広和

国際研究フォーラム
「ロシアと中国の国境：諸民族の混住する社会における「戦略的パートナーシップ」とは何か?」 “The Russian-Chinese Border: A ‘Strategic Partnership’ in Mosaic of Indigenous Societies”
平成26年1月8日～9日
代表者　小長谷有紀

公開フォーラム
「古代文明の生成過程―西アジアとアンデス」 “Formation of Ancient Civilizations: West Asia and Andes”
平成26年1月26日
開催場所　JPタワーホール(東京)
代表者　關　雄二

国際ワークショップ
「伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有―民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望」 “Re-Collection and Sharing Traditional Knowledge, Memories, Information, and Images: Problem and the Prospects on Creating Collaborative Catalog”
平成26年1月28日～29日
代表者　伊藤敦規

研究成果の出版 平成25年度

館内の出版物

国立民族学博物館研究報告

38巻1号　**論文**
蔵語和汉语对嘉戎语的影响变迁情况研究　严木初
研究ノート
東南アジアにおける客家研究の新傾向―シンガポール、マレーシアを対象として　河合洋尚
論文
Expedition to the Tuvans in China, Russia, and Mongolia in 2012: A Preliminary Report　Marina V. Mongush
資料
南島研究回想　伊藤幹治
悪霊ミカ祓いの祈祷書*Mi kha' i bzlog' gyur* 校注　村上大輔

38巻2号　**論文**
アンデス文明形成期の金属製品の製作に関する一考察―クントゥル・ワシ遺跡およびパコバンバ遺跡出土の金属製品の蛍光X線分析の結果から　日高真吾・関　雄二・橋本沙知・椎野　博
研究ノート
ムスリムの国へ行ったムスリム―トルコ・イスタンブルに住む中国新疆ウイグル族の事例から　熊谷瑞恵
資料
琉球弧・八重山諸島における通耕実践と生態資源利用―19世紀末期から20世紀初頭における「高い島」と「低い島」との往来をめぐる事例　藤井紘司

38巻3号　**論文**
日本における民法施行前の「講」と現代非営利組織(NPO)との特性の共通性　出口正之
支援のフィールドにおける人類学―カレンニー難民の移動と定住　久保忠行
研究ノート
貝殻交易ネットワークの地域史―ビスマルク諸島とソロモン諸島地域間におけるムシロガイ交易の歴史的変遷と現状　深田淳太郎
資料
ベトナムにおけるゴング製作―フッキウ村を事例として　柳沢英輔

38巻4号　**Special Issue**
Exhibiting Cultures: Comparative Perspectives from Japan and Europe
Introduction: Exhibiting Cultures from Comparative Perspectives　Akiko Mori
Exhibiting European Cultures in the National Museum of Ethnology, Japan　Akiko Mori
Exhibiting European Cultures in Berlin, Germany　Elisabeth Tietmeyer
Museum Experiments in Living Ethnography: ‘At Home in Japan’ in London?　Inge Daniels
The Exhibition of Japanese Cultures in the National Museum of Ethnology　Shingo Hidaka
論文
移民の軍務と市民権―1997年以前グルカ兵の英国定住権獲得をめぐる電子版新聞紙上の論争と対立　上杉妙子

Senri Ethnological Studies (SES)

no. 83　*Chiefs, Hunters and San in the Creation of the Moremi Game Reserve,Okavango Delta: Multiracial Interactions and Initiatives, 1956-1979,* by Maitseo M. M. Bolaane
no. 84　*Anthropological Studies of Whaling,* edited by Nobuhiro Kishigami, Hisashi Hamaguchi and James M. Savelle
no. 85　*Research on Paper and Papermaking: Proceedings of an International Workshop,* edited by Naoko Sonoda, Claude Laroque, Jeong Hye-young and Chen Gang
no. 86　*Oirat People: Cultural Uniformity and Diversification,* edited by I. Lkhagvasuren and Yuki Konagaya
no. 87　*The Anthropology of Care and Education for Life: Searching for Resilient Communities in Multicultural Aging Societies,* edited by Nanami Suzuki
no. 88　*On the Trail of Taro: An Exploration of Natural and Cultural History,* by Peter J. Matthews

Senri Ethnological Reports (SER)

114号　モンゴル口頭伝承の一資料―モンゴル国ホブド県トルグードのノースタイ氏の語り　小長谷有紀・斯琴編
115号　モンゴル国における20世紀(3)　小長谷有紀・J. ルハグワデムチグ・Ma. ロッサビ・Mo. ロッサビ編
116号　中国鄂伦春语方言研究　韩　有峰・孟　淑贤著
117号　中央アンデス農耕文化論―とくに高地部を中心として　山本紀夫著
118号　世界における無国籍者の人権と支援―日本の課題―国際研究集会記録　陳　天璽編

民博通信

141号　**評論・展望**
アーカイブ映像の創造的活用にむけて―エンサイクロペディア・シネマトグラフィカを事例に　川瀬　慈
142号　**評論・展望**
みんぱく若手研究者奨励セミナー　平井京之介
セミナー参加者の声　河野明佳・鈴木佑記・久保忠行・櫻田涼子・小林宏至・奈良雅史・上村淳志
143号　**評論・展望**
文化人類学の輝きをもとめて　小長谷有紀
144号　**評論・展望**
民博の舞台裏で―展示にまつわる人びととその業務上の裁量　太田心平

国立民族学博物館研究年報2012

研究年報は、本館の研究部の年次活動を総覧的に広報するために発行され、研究戦略センターが編集責任を負っています。研究活動にとどまらず、展示や社会連携など教員がかかわるすべての年次活動を網羅的に示し、広報し、自己点検・評価書に添付する資料としての役割も加わるようになっています。

国立民族学博物館論集(館外出版)

2号　キリスト教文明とナショナリズム―人類学的研究　杉本良男編

館外での出版物

国内外の出版社から刊行を制度的に奨励しており、昨年度は以下のものが出版されました。

平和の人類学　小田博志・関　雄二編　法律文化社
中国の民族文化資源―南部地域の分析から　武内房司・塚田誠之編　風響社
ヨーロッパ人類学の視座―ソシアルなるものを問い直す　森　明子編　世界思想社

研究戦略センター

研究戦略センターは、文化人類学・民族学とその周辺諸分野の最新の研究動向を踏まえ、機関研究をはじめとする本館の研究活動の戦略を策定することを目的として、平成16年4月に設置されました。

平成25年度事業

研究戦略の策定

文化人類学・民族学研究の研究動向調査と情報の発信

我が国における文化人類学・民族学の研究センターとして、国内外の最新の研究動向を把握して館内外に情報発信しています。そのために「民族学・文化人類学の研究動向と学術的・社会的ニーズの調査、さらに、そのための他の研究機関との協力関係の構築に関する研究」という研究プロジェクトを立ち上げ、機関研究員を採用して調査をおこなっています。その結果は、毎年度末に発行する『研究戦略センター活動報告』に報告されています。

文化人類学・民族学への学術的要請と社会的要請に関する調査研究

本館の機関研究や共同研究および他機関との連携を通じて得られるさまざまな学術分野からの要請と、フィールドワークの現場などから得られる社会的な要請に関する情報を本センターに集積し、文化人類学・民族学に何が求められているのかを調査しています。

研究戦略の策定と研究体制の整備および研究資料の整備

研究動向調査、学術的・社会的要請に関する調査を通じて得られた情報から、次期の中期目標、中期計画を含む、将来の研究戦略の策定をおこなっています。また、研究戦略に適した研究体制や、研究員制度のあり方を検討しています。さらに、文献図書資料、アーカイブズ資料など、研究に必要不可欠な資料の整備方法を検討しています。

学術潮流サロンの企画

研究戦略の策定のため、文化人類学・民族学以外の分野の研究動向を把握することを目的に、平成19年度より文化人類学・民族学に隣接する学問分野の研究者を招いて講演の後、参加者と自由に意見を交換する学術潮流サロンを開催しています。平成25年度は、共通テーマとして「身体の更新」を掲げて4回おこないました。

第1回	平成25年10月1日	武村政春(東京理科大学)	「複製的な『ゆらぎ』が身体をつくる」
第2回	平成25年10月21日	都甲　潔(九州大学)	「味と匂いを目で見る」
第3回	平成25年10月29日	舟橋國男(大阪大学)	「ヒトの動き：建築計画学における行動研究」
第4回	平成25年11月29日	宮田久嗣(東京慈恵会医科大学)	「依存の脳科学的構造と、新規治療薬の可能性: 違法性薬物から嗜好品、ギャンブル、インターネット依存まで」

研究プロジェクトの企画・立案・運営

機関研究の推進と運営に対する支援、人間文化研究機構の連携研究および他の大型研究プロジェクトの企画・立案

本館の機関研究プロジェクトの企画・遂行を支援するとともに、より効率的な研究体制がとれるようにプロジェクトの再編や実施方法を助言しています。また、人間文化研究機構における連携研究のための研究プロジェクトの遂行を支援しています。さらに、科学研究費補助金、日本学術振興会研究拠点形成プログラム、あるいは民間の財団による研究助成などの外部の競争的資金に関する情報を館員に提供し、全館を挙げて取り組むべき大型の研究プロジェクトの企画・立案をおこなっています。

研究プロジェクト・研究体制の評価

評価システムの整備と活用、実施されている研究プロジェクトの点検・評価

人間文化研究機構が作成する年度ごとの業務実績報告書の機関原案や、中期目標・中期計画の進行状況に対する中間評価、最終評価のための資料を作成しています。また、自己点検や外部評価委員会による意見、大学評価・学位授与機構による中期目標・中期計画にもとづく評価など、本館に関わる評価の結果を今後の研究体制、研究活動の改善に役立てていくための方策を検討しています。実施されている機関研究プロジェクトや共同研究の年次報告、中間報告等をとりまとめ、その活動を点検して、研究支援をおこなっています。

研究連携、研究協力

大学その他の研究機関との研究協力の推進

他の研究機関との研究協力を進めるため、機関研究や研究員制度のあり方を検討、整備しています。

若手研究者を対象にしたプロジェクト

若手研究者による共同利用を促進するため、平成18年度より「国立民族学博物館の共同利用に関する若手研究者懇談会」を開催してきました。平成21年度からは「みんぱく若手研究者奨励セミナー」として実施しており平成25年度は「アートを考える：人類学からのアプローチ」をテーマとして3日間開催しました。本館教員による機関研究プロジェクトの紹介に続いて、公募によって選ばれた参加者による個人研究発表が行われ、優秀発表者には「みんぱく若手セミナー賞」を授与しました。日本全国から国公私立大学在籍の大学院生等8名の参加がありました。
また、若手研究者の意見を受けて、平成20年10月より、試行的プロジェクトとして「若手研究者による共同研究」を開始しましたが、平成22年度からは制度化され、共同研究(若手)として公募しています。(13頁参照)

日本文化人類学会などのユーザー・コミュニティとの研究協力の推進

本館のユーザー・コミュニティとして、最も関係が深い学会である日本文化人類学会と平成20年2月27日に連携事業に関する協定書を取り交わしました。みんぱく主催の研究集会への協力及び学会が保有する文化人類学映像アーカイブズの処理と保管を連携して実施しています。また連携をさらに進めるため、協定の見直しを行い、個別の事業内容とは別の、包括的な協定である「日本文化人類学会との連携に関する協定」を締結しました。また、平成25 年3月には、日本国際理解学会との連携協定に調印し、博学連携事業を展開しました。さらに、平成26年3月には、金沢大学との連携・協力に関する協定に調印しました。

地域研究コンソーシアムとの連携

地域研究コンソーシアムは、「地域研究」を共通のテーマとするアカデミック・コミュニティの活動体であり、本館は平成18年5月に70番目の加盟組織となり、平成20 年より幹事組織の一員となっています。

研究活動に関する情報収集と研究成果の公開

研究部の活動に関する情報収集と研究年報の編集

本館でおこなわれている機関研究、共同研究、各個研究、科学研究費補助金などの外部資金による研究プロジェクトなど、あらゆる研究活動に関する情報を集積し、データ化して保存しています。また、毎年度研究年報の編集をおこなっています。

研究成果公開プログラムの活用による本館の研究活動の成果公開促進

研究成果をより効果的に公開し、社会還元を円滑に図るために、平成14年度に設けた「研究フォーラム促進プログラム」を拡充して、平成15年度より「研究成果公開プログラム」として位置づけました。本館で行われる共同研究、各個研究などを、シンポジウム、研究フォーラム、海外の学会での研究発表などの形で公開しています。平成25年度にはこの制度を活用して、4件のシンポジウム、3件の研究フォーラムが行われました。また、毎年東京と大阪で学術講演会を企画し、本館の研究活動の成果を広く社会に還元しています。(18頁参照)

文化資源研究センター

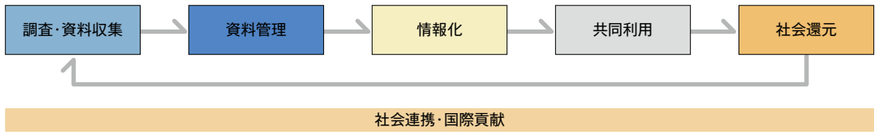
センターの設置目的

文化資源研究センターは、文化資源の体系的な管理と情報化、およびその共同利用や社会還元に向けて調査や研究開発を推進するとともに、実際に事業を推進する際の企画・調整をおこなうことを目的として、平成16年4月に設置されました。

文化資源には、人間の文化にかかわるさまざまな有形のモノやそれについての情報のほか、身体化された知識・技法・ノウハウ、制度化された人的・組織的ネットワークや知的財産など、社会での活用が可能な資源とみなされるものが広くふくまれます。こうした文化資源を人類共有の財産とすることで、グローバル化する世界で人びとが異なる文化への理解を深め、互いに共生していくための基盤をつくりだそうというのが、文化資源研究センターのめざすところです。

文化資源は、調査・収集されることでその価値が顕在化され、体系的な資源管理と情報化を経て、共同利用や社会還元に供することが可能となります。これらの各ステップはまた、社会連携や国際貢献の枠組みのなかで推進されます。このような一連のステップは、下図のようなフローの形で表現できます。

文化資源の調査・収集から社会還元へのフロー



各ステップは、それぞれ、諸問題を理論的に解明する「基礎研究」、それにもとづいて方式・体系・技術の開発やそのための予備調査などをおこなう「開発研究」の段階を経て、実際の「事業」として展開されます。

文化資源研究センターは、上記の各ステップに関わる先進的な基礎研究・開発研究と事業を推進する際の企画・調整をおこないます。

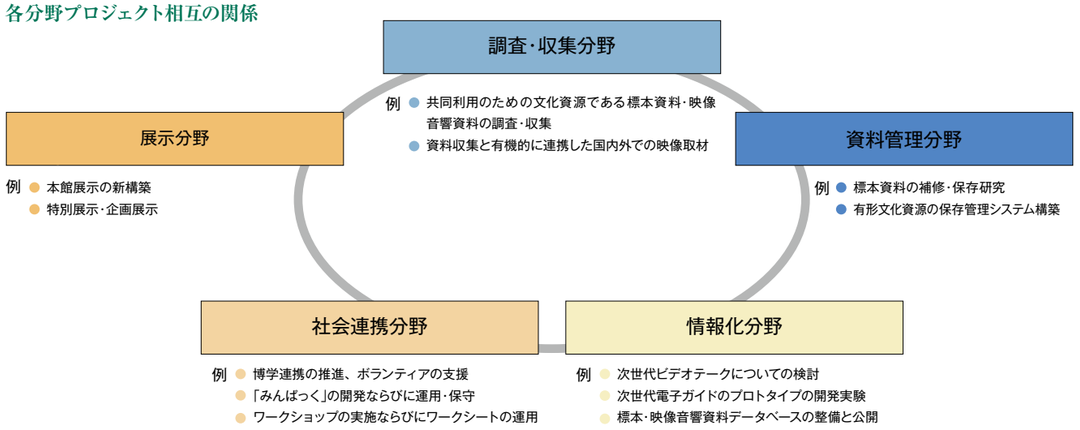
現在、本館では、文化資源研究センターが中心となり、全館的な取組みとして、本館展示の新構築を進めています。開館以来30年余が経ち、世界の社会状況や学問のありかた、さらには来館者がみんぱくに期待するものも、大きく変化しました。こうした変化に対応し、大学共同利用機関としての機能を最大限に活用してもらえるように、国内外の大学や博物館と共同しつつ、最新の研究成果を広く社会と共有するための展示を新たに構築しようというのが、本センターのねらいです。新たな展示は、展示に関わる三者、つまり展示の作り手としての研究者、展示の対象となる文化の担い手、そして展示を見る側としての来館者のあいだの、相互の交流と啓発の場、すなわちフォーラムとなることをめざしています。また、これまでの個々の地域文化の特徴を示す展示から、グローバル化の進展にともない、それぞれの地域と世界とのつながりを示すとともに、その動態も映しだす「グローカル展示」の実現をはかります。

文化資源プロジェクト

「文化資源プロジェクト」は、第2期中期目標・中期計画に沿って、大学共同利用機関としての共同利用基盤を整備するとともに、本館あるいは関連する他機関が所有する文化資源の体系化をすすめ、共同利用を促進し、学術的価値を高めるための研究プロジェクトです。

平成21年度から研究者コミュニティとの関係を強化するために、文化資源共同研究員の制度を導入し、提案されたプロジェクトの審査について、外部の有識者による意見聴取の制度も取り入れました。

各分野プロジェクト相互の関係



平成26年度文化資源プロジェクト一覧

調査・収集

「アイヌの文化」展示新構築のための資料収集	齋藤玲子
トゥバ映像記録の資料編の編集	佐々木史郎
研究公演「神への祈りと喜びの舞曲―バッハからバルトークへ―」にもとづくビデオテーク番組の制作	新免光比呂
和太鼓の製作工程と伝統技術の継承に関する映像取材	寺田吉孝
カリンガ音楽に関するビデオテーク番組の編集	寺田吉孝
ビデオテーク番組Guitars of Portugalの編集	寺田吉孝
ビデオテーク番組Guitars of Puerto Ricoの編集	寺田吉孝
彫金技術の映像取材と番組制作	日高真吾
展示記録映像のあり方に関する実践的研究	日高真吾
中央・北アジア展示新構築のための標本・映像音響資料収集	藤本透子
「ラージャスターン州の生活・信仰・儀礼」に関する映像資料の編集と現地語版の作成	三尾　稔
ネパール関連のビデオテーク番組の編集	南真木人
中国雲南省の少数民族の儀礼とキリスト教文化に関する映像番組の編集	横山廣子

資料管理

有形文化資源の保存・管理システム構築	園田直子
東日本大震災で被災した文化財の保管環境に関する調査研究3	日高真吾

情報化

佐々木高明（故名誉教授）による写真資料の学術情報化プロジェクト	池谷和信
「大島襄二コレクション」の整理とデータベース作成	久保正敏
世界の身装文化デジタルアーカイブの構築	久保正敏
東大資料の目録（「土俗品目録」）のデータ化	佐々木史郎
三次元CGを利用した民族建築デジタルアーカイブの構築	佐藤浩司
「沖守弘インド民族文化写真資料アーカイブ」のデータベース作成	三尾　稔
京都大学学術調査隊関連資料の整理とデータベース作成	吉田憲司

展示

平成27年度特別展「日韓食文化―食と博物館」（仮称）開催準備活動	朝倉敏夫
企画展「未知なる大地　グリーンランドの自然と文化」	岸上伸啓
アイヌの文化展示新構築事前調査	齋藤玲子
企画展「シカチアリャン岩絵展」（仮称）準備	佐々木史郎
企画展「みんぱくおもちゃ博覧会：大阪府指定有形民俗文化財『時代玩具コレクション』」	日高真吾
平成25年度展示新構築にかかるみんぱく電子ガイドコンテンツの製作	福岡正太
次期ビデオテークのユーザーインターフェースデザイン研究	福岡正太
多機能端末における公開データベースの一般ユーザー向け応用の研究	福岡正太
国立民族学博物館における展示情報の館外活用に関する技術的研究―ビデオテークを中心とするみんぱくコンテンツ発信環境の構築―	福岡正太
次世代みんぱく電子ガイドによる来館者向けWebサービスの研究と開発―観覧支援サービスと展示情報提示の繋合―	福岡正太
平成26年度本館展示新構築（南アジア展示・東南アジア展示）	吉田憲司
特別展「イメージの力―国立民族学博物館コレクションにさぐる」	吉田憲司
次世代ユニバーサルミュージアム／展示空間における知覚鑑賞の評価手法の開発	吉田憲司

社会連携（研究開発）

博学連携教員研修ワークショップ2014 in みんぱく	上羽陽子
「展示版みんぱっく」の制作『あるく、ウメサオタダオ展』	上羽陽子
カムイノミ及び重要無形民俗文化財「アイヌ古式舞踊」演舞の実施	齋藤玲子
みんぱっく「アンデスの玉手箱」改訂版の制作	關　雄二
みんぱっく「ジャワ文化をまとう」改訂版の制作	福岡正太

文化資源計画事業

「文化資源計画事業」は、研究成果を普及することを目的とした事業で、2つの分野（資料関連、展示・社会連携）に分けられます。

平成26年度文化資源計画事業一覧

資料関連

「朝鮮半島の文化」に関する映像資料の開発と制作：韓国国立民俗博物館との交流事業	朝倉敏夫

展示・社会連携

ワークショップの実施ならびにワークシートの運用	上羽陽子
ボランティア活動支援	上羽陽子
年末年始展示イベント「ひつじ」	野林厚志
日本の文化展示「祭りと芸能」、「日々のくらし」の部分改修	日高真吾

国際学術交流室

設置目的

国際学術交流室は、組織的な国際交流を円滑に進めることを目的にして、平成22年4月に設立されました。
本館は、創設以来グローバルな視野をもち、積極的に海外の研究機関や研究者と連携、協力しながら研究活動と博物館活動をおこなってきました。国際学術交流という点では大学共同利用機関の中でも先駆的な役割を果たしてきたといえるでしょう。
20世紀末に始まった情報通信技術革命は、 国際的な情報交換のスピードと量を飛躍的に増大させました。その結果、本館の国際的な活動はもはや個人の努力や関係では処理しきれない状態となり、組織的、戦略的な国際交流が求められています。国際学術交流室は、これまで蓄積されてきた海外の研究機関、 研究者との関係を活かしつつ、本館がより戦略的、より組織的に国際的な研究連携や共同研究を推進するために、以下のような活動を行っています。

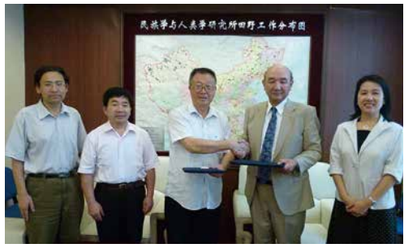
海外の研究機関との研究連携、研究協力の推進

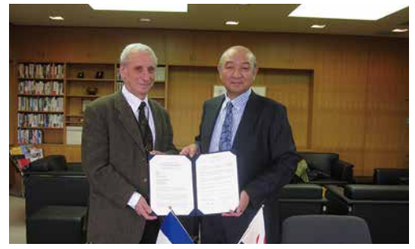
研究連係や研究協力のために、海外の研究機関との学術協定について、調査・締結を進めています。
平成25年度は、これらの協定に基づき、5月にアンタナナリボ大学(マダガスカル)と、9月と3月にロシア民族学博物館(ロシア)と、10月に教皇庁立ペルーカトリカ大学(ペルー)と、11月に中国社会科学院民族学・人類学研究所(中国)と、3月に国立パリ・デカルト大学・人口開発研究所(フランス)と国際シンポジウムやワークショップを開催しました。

協定先機関名	協定締結日	協定の概要および平成25年度活動概要
国立パリ・デカルト大学・人口開発研究所（フランス）	平成24年11月30日	学術交流および協力の推進など。25年度には、国際シンポジウム「個人・家族・国家のゆくえ―文化人類学と人口学からの学際的研究」を本館において開催し、日仏双方から研究者が研究成果の報告を行った。
中国社会科学院民族学・人類学研究所（中国）	平成24年8月28日	学術交流ならびに研究プロジェクトや研究資料、学術情報及び公開出版物の交換と相互利用の展開など。25年度には、国際シンポジウム「中日の人類学・民族学の理論的刷新とフィールドワークの展開」を同研究所にて開催し、日本から14名の研究者が出席し発表した。
国立博物館（フィリピン）	平成24年7月18日	共同研究、研修、出版、展示等のプロジェクトにおける学術的な研究および交流の促進など。25年度には、野生サトイモとこれに関連する植物種(Colocasia spp.)の民族植物学、生態学、分布に関する調査を行った。
アシウィ・アワン博物館・遺産センター（米国）	平成24年6月3日	学術協力、共同研究プロジェクトの展開、博物館資料の展覧および教育分野における協力活動など。25年度には、本館のフォーラム型情報ミュージアム構想を深化するための各種事業などを行うため、同機関から研究者を招へいし、国際シンポジウムや国際ワークショップを行った。
ベトナム生態学生物資源研究所（ベトナム）	平成24年3月22日	共同研究、研修、出版、展示等に関するプロジェクトにおける学術的な研究および交流の促進など。25年度には、11th International Aroid Conferenceの準備と運営を同研究所の共催者と共に行い、アメリカ・ドイツ・中国ほか多くの国々のサトイモ属植物研究の主要な研究者が参加した。
ロシア科学アカデミー・ピョートル大帝記念人類学民族学博物館（クンストカメラ）（ロシア）	平成23年10月21日	学術・文化の両分野における相互交流および協力関係を発展など。25年度には、同博物館が有する日本関連の資料のうち、シーボルト、フィッシャーが収集した資料に関する調査を実施した。
ロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族歴史学考古学民族学研究所（ロシア）	平成23年6月1日	考古学、人類学、及び民族学の共同研究の推進など。25年度には、同研究所から人類学者を1人招聘し、民族社会学に関する共同研究を実施した。また、極東ロシアとオセアニアの政治動向と先住民の活動に関する比較共同研究を実施した。
ロシア民族学博物館（ロシア）	平成22年12月3日	博物館学、調査研究、文化財保護の各分野における協力と相互支援の推進など。25年度には、日本・ロシア双方で、ワークショップや視察を行い、両国から多数の参加があった。また、本館にてシベリア諸民族の文化に関する国際シンポジウムを開催し、同博物館からも研究者を招聘した。
教皇庁立ペルーカトリカ大学（ペルー）	平成22年12月1日	学術交流ならびに共同的な研究事業の推進など。25年度には、同大学大学院アンデス研究プログラムとの共催で、公開セミナーを開催した。また、機関研究「近代ヒスパニック世界における国家・共同体・アイデンティティースペイン領アメリカの集住政策の研究」の成果刊行準備を同大学と進めた。
アンタナナリヴ大学（マダガスカル）	平成22年11月22日	学術分野における相互協力活動の推進など。25年度には、国際シンポジウムを開催し、両機関の研究者らが研究発表を行った。本館開催の特別展「マダガスカル霧の森のくらし」の閉幕にあわせて同大学から技師が来日し、両機関の資料に関して整理と管理を進めた。
エジンバラ大学（英国）	平成22年5月17日	学術交流ならびに共同的な研究事業の推進など。25年度には、共同出版事業として、英文叢書を順次刊行する計画に基づき、叢書刊行を目指し協力して編集作業にあたった。
故宮博物院（中国）	平成21年10月16日	相互の学術交流、研究プロジェクトの展開、博物館展示・教育活動に関する協力、学術情報・出版物の交換など。25年度には、同博物館を訪問し、曼荼羅に関する共同研究の成果出版について、編集・校正などを行った。
国立台北芸術大学（台湾）	平成21年5月15日	相互の学術交流、研究プロジェクトの展開、博物館展示・教育活動に関する協力、学術情報・出版物の交換など。25年度には、同大学にて「博物館におけるモノを通じた文化の解釈と表象」と題してワークショップを実施した。国立台湾博物館にて、講義と討論・公開セミナーや現地研修を実施した。
内蒙古大学（中国）	平成20年9月22日	双方の教職員・研究者の交流、研究プロジェクトの展開、博物館展示・教育分野における協力、学術資料・出版物の交換など。25年度には、共同研究「梅棹忠夫モンゴル研究資料の学術的利用」の成果を日本モンゴル学会春季大会および秋季大会で発表し、同大学教員とともに中国内モンゴル自治区にて現地調査を実施した。
韓国国立民俗博物館（韓国）	平成19年7月11日	研究者交流、共同研究、研究集会の実施、博物館展示・教育活動に関する協力、学術情報・出版物の交換など。25年度には、企画展「アリラン」を民博にて開催し、芸術団のアリラン公演など様々な企画を実施し、東京での巡回展にも展示協力した。22年度より継続して、韓国で映像制作の指導研修を行った韓国学生の制作作品について、本館においてその評価・指導を行い、ビデオテーク作品として公開している。
順益台湾原住民博物館（台湾）	平成18年7月1日	台湾原住民族の現代的動態に関わる人類学的、言語学的、歴史学的研究、国立民族学博物館ならびに他の博物館に所蔵されている台湾原住民族関連の資料に関わる調査、報告書・研究誌の発行。25年度には、公開シンポジウム「伝統と創意-台湾における原住民族工芸」への参加、協力や、日本・台湾双方での研究会、順益台湾原住民博物館20周年記念論集の編集など、台湾原住民族の文化と社会に関する研究活動を実施した。
国立サン・マルコス大学（ペルー）	平成17年6月14日	考古学分野における共同研究員調査の遂行、ならびにそれに基づく学術交流を促進すること。25年度には、バコバンバ遺跡の発掘調査を実施し、その成果を、アメリカ考古学協会の第78回年次大会、ペルーで開催された国際シンポジウムや講演会、ラテンアメリカおよびカリブ海地域国際研究所連盟会議（FIEALC）、古代アメリカ学会、東京で開催した公開フォーラムなどで発表した。

ロシア民族学博物館との協定に基づく国際ワークショップ(本館)

中国社会科学院民族学・人類学研究所との協定に基づく国際シンポジウム(北京)


中国社会科学院民族学・人類学研究所との協定調印式(北京)


国立パリ・デカルト大学・人口開発研究所との協定調印式(本館)

みんぱくフェローズ

これまで本館と関わりのあった海外の研究者、および本館と関連の深い国内外の研究機関を「みんぱくフェローズ」として位置づけ、そのネットワークを構築しています。
ネットワーク内の情報交換の手段として、英文のニューズレター（MINPAKU Anthropology Newsletter）を年2回発行し、交流を促進しています。「みんぱくフェローズ」として約1,200件が登録されています。

フェローズ地域別一覧　平成26年3月31日現在

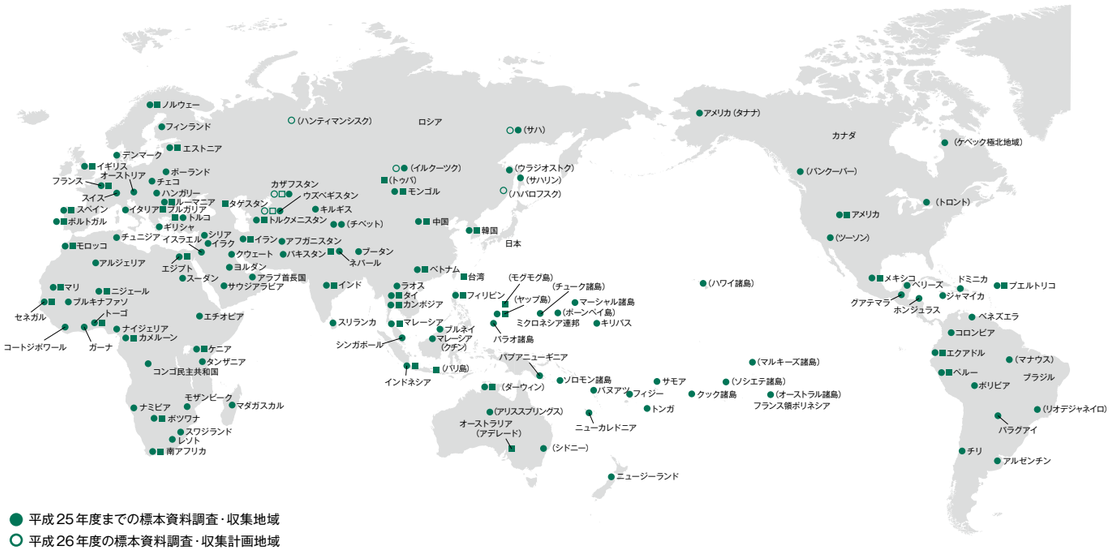
地域	
アジア・中東・オセアニア	700
ヨーロッパ	210
北米・中南米	226
アフリカ	57
合計	1,193

資料・情報の整備と社会還元

本館では、文化人類学・民族学を核とする諸分野の資料や情報を集積・整備して国内外研究者の共同利用に供するとともに、展示や各種事業などを通じて研究成果の社会還元をおこなっています。そのために、資料の収集、管理、情報整備、データベースとコンテンツの制作、展示、各種事業への展開の方法についても研究を重ねています。
情報管理施設は、これらの活動を支援するために設けられた附属施設です。

資料とデータベース

標本資料収集および映像取材地域



● 平成25年度までの標本資料調査・収集地域
○ 平成26年度の標本資料調査・収集計画地域

■ 平成25年度までの映像取材地域
□ 平成26年度の映像取材計画地域

諸資料の所蔵一覧 平成26年3月31日現在

標本資料(未登録資料含む)	339,548点
海外資料	176,732点
国内資料	162,816点

映像・音響資料	70,588点
映像資料	7,937点
音響資料	62,651点

文献図書資料	
図書	656,115冊
日本語図書	264,266冊
外国語図書	391,849冊
雑誌	16,908種
日本語雑誌	10,090種
外国語雑誌	6,818種

HRAF Human Relations Area Files	
地域(民族集団)ファイル	385ファイル
原典(テキスト)	7,141冊

データベース一覧 平成26年3月31日現在

本館の所蔵資料をはじめ、さまざまな研究資料や研究成果の情報をデータベース化し、館内外に広く提供しています。
(＊印は、館内でのみ利用できるデータベース。各データベースの説明最後の数値は収録レコード数。)

標本資料

標本資料目録
本館が所蔵する標本資料(生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など)の情報(画像付き)。ほぼすべての資料について、標本名、地域、民族、寸法・重量、受入年度などの基本情報を収録。 〔277,206件〕

標本資料詳細情報
本館が所蔵する標本資料(生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など)の情報(画像付き)。標本名、現地名、訳名、収集地、使用地、使用民族、使用年代、用途・使用法、製作地、製作法・材料など、より詳しい情報を収録。
〔館内公開:264,406件(内インターネット公開:49,808件)〕

標本資料記事索引
本館関連出版物から所蔵標本資料の解説部分を抽出し、その書誌事項を標本資料別に整理した情報。 〔50,661件〕

韓国生活財
ソウルの李さん一家の生活財を網羅した情報。アパートの中にあったすべての物について、配置と入手方法、物にまつわる家族の思い出を記録(画像付き)。
〔7,827件〕

George Brown Collection(ジョージ・ブラウン・コレクション)
宣教師であり神学博士でもあったジョージ・ブラウン氏が19世紀から20世紀初頭にかけて南太平洋諸島で収集し、現在、本館に収蔵されている民族誌資料の基本情報(画像付き)。 〔2,992件〕

カナダ先住民版画 ＊
本館が所蔵する代表的なカナダ先住民版画の基本情報と解説(画像付き)。特別展「自然のこえ 命のかたち―カナダ先住民の生み出す美」(2009年)の展示資料を中心に収録。 〔158件〕

映像・音響資料

映像資料目録
本館が所蔵する映画フィルム、ビデオテープ、DVDなど映像資料の情報。
〔7,881件〕

ビデオテーク
本館展示場で提供しているビデオテーク番組の情報。ビデオテークブースと同じメニューで番組を探したり、キーワードで検索が可能。 〔644件〕

音楽・芸能の映像
本館が世界各地で取材したビデオ映像から、音楽演奏や芸能に関係する部分を、1曲または1テーマごとに抽出した動画データベース。映像は館内限定公開。
〔849件〕

ネパール写真(日本語版、英語版)
「西北ネパール学術探検隊」(1958年)に参加した高山龍三氏(当時大阪市立大学大学院生)らがネパールで撮影した写真、および、同隊が収集し、現在本館に収蔵されている標本資料の情報(画像付き)。 〔3,879件〕

松尾三憲旧蔵絵葉書コレクション
松尾三憲(みのり)氏が、1919年から1923年までの海軍在職中に、訓練航海の途上訪れた現地で買い求めた絵葉書の情報(画像付き)。高精細でデジタル化した絵葉書画像の連続的な拡大が可能。 〔169件〕

朝枝利男コレクション ＊
朝枝利男氏が1930年代にアメリカの学術調査団に数回にわたり同行し撮影した、南太平洋の人々や動植物の写真の情報(画像付き)。 〔3,966件〕

タイ民族誌映像―精霊ダンス― ＊
田辺繁治本館名誉教授が調査したタイの精霊ダンスの写真情報(画像付き)。精霊ダンスの系統、開催地域、祭主から写真群を閲覧できる。写真は調査報告(タイ語)とも関連づけられている。 〔写真:10,082件 調査報告:41件〕

東南アジア稲作民族文化綜合調査団写真 ＊
日本民族学協会が1957年から1964年にかけて三次にわたり東南アジアに派遣した調査団のうち、第一次調査団(1957年)と第二次調査団(1960年)が記録した写真の情報(画像付き)。 〔4,393件〕

オーストラリア・アボリジニ研究フィールド写真 ＊
小山修三本館名誉教授が、1980年から2000年にかけて、オーストラリア・アボリジニ文化の調査で記録した、儀礼から風景までの多彩な写真の情報(画像付き)。 〔7,999件〕

西北ネパール及びマナスル写真 ＊
「西北ネパール学術探検隊」(1958年～1959年)が撮影した写真の情報(画像付き)。一部に「日本山岳会第一次マナスル登山隊」(1953年)科学班(推定)の写真を含む。本館に移管された旧文部省史料館資料の一部。 〔620件〕

京都大学学術調査隊写真コレクション ＊
「京都大学アフリカ学術調査隊」(1961年～1967年)と「京都大学探検部トンガ王国探検隊」(1960年)が撮影した写真の情報(画像付き)。 〔24,018件〕

梅棹忠夫写真コレクション ＊
梅棹忠夫本館初代館長が、世界各地における調査研究活動の過程で撮影した写真の情報(画像付き)。 〔35,420件〕

音響資料目録
本館が所蔵するレコード、CD、テープなど音響資料の情報。 〔62,651件〕

音響資料曲目
本館が所蔵する音響資料について、音楽の曲単位、および昔話の一話単位の情報。 〔346,772件〕

文献図書資料

図書・雑誌目録
本館が所蔵する図書・雑誌の書誌・所蔵情報。
〔図書: 656,115件 雑誌タイトル: 16,908件〕

梅棹忠夫著作目録(1934 ～)
梅棹忠夫本館初代館長の論文・著書から本の帯の推薦文まで、あらゆる著作を網羅した目録データベース。 〔6,473件〕

言語資料

中西コレクション―世界の文字資料―
世界のさまざまな文字で書かれた図書・新聞・手稿・標本などの資料に関する分析情報と書誌情報、文字サンプルの画像。これらの資料は、中西印刷株式会社・故中西亮氏が世界各地で収集。 〔2,729件〕

吉川「シュメール語辞書」
吉川守氏(広島大学名誉教授)が40年ほどの年月をかけて完成させた、シュメール語の研究ノート。親字33,450語をキーワードに検索・閲覧できる。
〔キーワード:33,450語(40,596頁)〕

Talking Dictionary of Khinina-ang Bontok(ボントック語音声画像辞書)
Lawrence A. Reid氏(ハワイ大学名誉教授)が編集した、フィリピン・ルソン島北部で話されるボントック語のギナアン方言の辞書。語の派生関係、例文、音声・画像などのデータを結びつけたマルチメディア・データベース辞書。
〔見出し語:7,637語〕

日本昔話資料(稲田浩二コレクション)
稲田浩二氏(当時京都女子大学教授)らのグループが、1967年から1978年にかけて日本各地29道府県で現地録音取材した日本昔話資料(446本のテープ・約190時間)の情報(音声付き)。音声は館内限定公開。 〔3,696件〕

rGyalrongic Languages(ギャロン系諸語)[英語、中国語]
長野泰彦本館名誉教授とMarielle Prins博士が編集した、中国四川省の西北部で話されるギャロン系諸語のデータベース(音声付き)。81の方言ないし言語それぞれについて、426または1200の語彙項目と200文例を収録している。
〔語彙:39,826語 文例:15,706件〕

服装・身装文化資料

衣服・アクセサリー
本館が所蔵する衣服標本資料とアクセサリー標本資料の詳細分析情報、および関連フィールド写真の情報(画像付き)。 〔21,485件〕

身装文献
身装文化に関する雑誌記事、図書の索引情報。1)服装関連日本語雑誌記事(カレント)、2)服装関連日本語雑誌記事(戦前編)、3)服装関連外国語雑誌記事、4)服装関連日本語図書、5)服装関連外国語民族誌で構成。 〔159,766件〕

近代日本の身装電子年表
洋装がまだ日常に定着していなかった1868年(明治元年)から1945年(昭和20年)の日本を対象とした身装関連の電子年表。「事件」と「現況」、「その年の情景」、「回顧」、テキスト画像で構成される。当時の新聞記事と身装関連雑誌から情報を収録。 〔10,049件〕

その他

国内資料調査報告集 ＊
日本国内における、1) 民具などの標本資料類の所在、2) 伝統技術伝承者の所在、3) 民族・民俗映像記録の所在、4) 民族・民俗関係出版物の所在、に関する情報。本館が委嘱した国内資料調査委員による調査報告集(1980年～2003年)をデータベース化。 〔21,373件〕

諸資料の利用 平成25年度

本館の所蔵する諸資料は、館内外における諸分野の研究や大学教育、他の博物館への貸付などを通しての社会還元に利用されています。
諸資料の利用に関するお問い合わせは、「民族学資料共同利用窓口」で受けつけています。
平成25年度受付件数は、345件です。

民族学資料共同利用窓口
TEL・FAX　06-6878-8213
URL　http://www.minpaku.ac.jp/research/sharing/helpdesk

1　標本資料の貸付件数　10件　貸付資料数　1,246点

上記のうち、展覧会の展示点数全体における本館資料の貸付件数の占める割合が50パーセントを超えるものは、下記のとおりです。

貸付先	展覧会名	展覧会期間	貸付資料	貸付点数／全体の展示点数・貸付資料が展示資料に占める割合
北海道立北方民族博物館	極北の島グリーンランド	平成25年7月13日～10月14日	呪術用護符など	92点/150点(61%)
公益財団法人安部榮四郎記念館／松江歴史館	イヌイット版画展 カナダ先住民の生み出す美	平成26年1月17日～1月30日	イヌイット版画など	89点/99点(90%)
国立新美術館	イメージの力―国立民族学博物館コレクションにさぐる	平成26年2月19日～6月9日	仮面など	640点/640点(100%)
埼玉県立歴史と民俗の博物館	屋根裏部屋の博物館 -Attic Museum-	平成26年3月21日～5月6日	オシラサマなど	337点/371点(91%)

2　標本資料の特別利用(原板使用・写真撮影・熟覧)件数　87件　1,182点

上記のうち、大学関係5件（調査研究、著作の参考資料としての写真利用など）、博物館関係33件（調査研究、展示に係る写真利用など）

3　映像資料の利用件数　136件　貸出点数　433点

上記のうち、大学関係19件　63点、研究用(個人・研究会など)64件　230点

4　文献図書資料

特別利用(原版使用・写真撮影)19件(うち調査研究、著作への写真使用など12件)
文献複写受付　5,271件(うち大学などの機関　3,718件)　文献複写依頼　549件
現物貸借受付　1,000件(うち大学などの機関　946件)　現物貸借依頼　502件

標本資料収蔵庫

資料の保存

本館では、研究や展示などに使用する各種の学術資料を収集しています。資料の大半をしめる標本資料には、虫やカビの害を受けやすい有機素材が多く使われているため、資料の防虫・殺虫対策には特別な注意を払っています。たとえば海外からの新着資料には、収集地と日本の自然環境や生態系が大きく異なるため、燻蒸庫で薬剤による殺虫・殺菌処理をおこなっています。一方、日本国内に入ってから加害された資料には、できるかぎり薬剤を用いない殺虫処理法をおこなうなど、収集地や加害環境、材質の違いを考慮に入れながら殺虫処理法を使い分けています。このような本館特有の防虫・殺虫対策を有効に実施するため、平成19年に、大型のウォーク・イン高低温処理庫を新設するとともに、既存の燻蒸庫を、二酸化炭素処理や低酸素濃度処理もおこなえる多機能燻蒸庫に改修しました。また、燻蒸使用後の薬剤処理を目的に、触媒燃焼式の除害装置を設置することで、「ひとに、ものに、自然にやさしい」資料管理を実現しています。これらのシステムは、本館が、他大学などの研究者とともに資料の有効活用を支えるためにおこなっている、保存科学研究の成果のひとつでもあります。

ウォーク・イン高低温処理庫

二酸化炭素処理や低酸素濃度処理もおこなえる多機能燻蒸庫

みんぱく図書室の活動

利用案内　開室日時　月・火、木曜日～土曜日　10:00 ～ 17:00
＊日曜日、祝日、水曜日および博物館休館日は閉室

利用資格　どなたでもご利用できます。貴重図書などの一部を除き、資料の貸出もできます。
貸出をご希望の方は、現住所・お名前を確認できるもの(免許証、学生証など)をご持参ください。

1　教育・研究支援

本館が所蔵する文献図書資料は、専門性の高い蔵書構成となっています。マイクロフィルムリーダーを3台設置し、カラーコピー機での複写サービスもおこなっています。カウンターには司書資格を有するスタッフが常駐し、大学共同利用機関として、教育・研究活動の支援体制を整えています。

図書室カウンター

2　文献図書資料の国立情報学研究所を介した目録情報公開を推進

平成25年度は、世界26言語の図書を目録登録し、蔵書冊数は656,115冊となりました。また、NACSIS-CAT(全国規模の総合目録データベース)への遡及入力事業として、日本語図書約29,000冊を始めとして、中国語、難読語、その他諸語の図書約6,000冊の他、コレクション資料から牧野漢箱1,998冊を追加で登録しました。図書類約56万冊の84%が入力済みとなりました 。

3　社会貢献など

一般利用者も館外貸出利用ができます。平成25年度の一般利用者の登録者数は277名、館外貸出冊数は2,037冊あり、順調に利用されています。

4　蔵書検索

本館が所蔵する文献図書資料は公開されていて、どなたでも、どこからでもパソコンや携帯電話から検索できます。平成25年度の館外からの検索回数は、パソコン158,303回、携帯電話で958回ありました。

雑誌コーナー

学術情報リポジトリ

平成22年1月に一般公開した「みんぱくリポジトリ」には、館内出版物『Senri Ethnological Studies』、『国立民族学博物館調査報告(Senri Ethnological Reports)』、『国立民族学博物館研究報告』、『国立民族学博物館研究報告別冊』、『国立民族学博物館研究叢書』等が登録され、さらに、外部で出版されたもののうち、利用許諾が取得できた論文を随時公開しています。その数は、25年度末時点で約4,158コンテンツで、論文のダウンロード利用数は月平均約39,000件に達しています。

民族学研究アーカイブズの構築

本館では創設以来、文化人類学・民族学研究者の研究ノートや原稿、フィールドで作成した映像・録音記録などさまざまな資料を集積してきました。これらを活用すべく図書委員会の下に設置された「アーカイブズ部会」により、平成25年度も継続してアーカイブズ資料の実態調査とリスト作成をおこないました。今後も実態調査とリスト作成作業及びデジタル化を継続し、順次公開していくことを目指します。また、初代館長梅棹忠夫の残した、フィールドノート、スケッチ、写真、メモ、原稿、著作、書評など、知的生産の素材とそこから生産された多種多様かつ膨大なアーカイブズ資料を整備・保管する収蔵施設として、平成25年4月に「梅棹資料室」を設置しました。専属担当者(アーキビスト)が資料を分析・整理し、主に学術研究等に活用するための支援を行うことを目指しています。

保存箱に収納されたアーカイブズ資料

展示

展示の理念と構成

みんぱくにおける展示は、文化人類学・民族学とその関連諸分野の研究成果を多様なメディアを通じて社会に公開し、世界各地の文化についての認識を深めるとともに、文化の違いを超えた相互理解の場を提供することを目的としています。展示は、本館展示と特別展示・企画展示で構成されます。本館展示では、世界の文化の多様性と共通性についての広い理解が得られるよう、常設的な展示をおこなっています。一方、特別展示・企画展示は、特定のテーマについて深く掘り下げた内容の展示を、期間を限って、年に数回開催するものです。

本館展示

本館展示は、地域展示と通文化展示から構成されています。

地域展示では、世界をオセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、それに日本を含むアジア各地域に分け、オセアニアを出発して東回りに世界を一周し、最後に日本にたどり着く構成をとっています。日本の文化を世界各地の文化との関連の中で理解できるように配慮したものです。みんぱくでは、創設以来、世界の民族文化に優劣はなく、すべて等しい価値をもつという認識にもとづいて、展示をつくり上げてきました。それぞれの文化に見られる違いは、人類の営みの豊かな多様性を示すものとして展示されています。また、世界の人びとの暮らしがよくわかるように、衣食住などの生活用品を中心とした展示になっているのも特徴のひとつです。

一方、通文化展示とは、地域単位でなく、特定のジャンルを取り上げて広く世界の民族文化を通覧する展示で、現在は音楽と言語についての展示を常設しています。

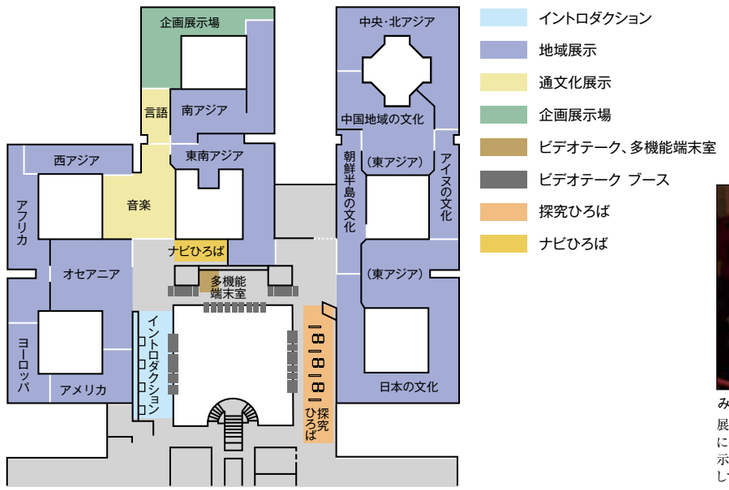
本館展示は、1977年の開館以来30年余が経ち、世界の社会・文化的状況や学問のありかたなどが大きく変化していることにともない、平成20年度から展示の新構築に着手しています。

その基本的な考え方は、以下の5点に要約できます。1.国内外の研究者の力を結集する大学共同利用機能の活用。2.展示に関わる三者、つまり展示をつくる研究者と展示の対象となる文化の担い手、そして展示の利用者が相互に交流・啓発して文化の違いを超えたフォーラムとしての展示の展開。3.地域と世界や日本とのつながりとともに、文化が接触して変化する動態も示すグローカル展示への刷新。4.情報提供の高度化や深化。5.利用者の多様な要求にこたえる展示の実現。

平成21年3月にはアフリカ展示と西アジア展示、22年3月には通文化展示の音楽展示・言語展示と共同利用展示場、インフォメーション・ゾーンの一部（ナビひろば）、23年3月にはオセアニア展示とアメリカ展示、24年3月にはヨーロッパ展示とインフォメーション・ゾーン、25年3月には日本の文化展示のうち「祭りと芸能」「日々のくらし」が生まれ変わりました。26年3月には朝鮮半島の文化展示、中国地域の文化展示、日本の文化展示のうち「沖縄のくらし」「多みんぞくニホン」を新しく構築しました。本館展示場内に設けている企画展示場では、期間を限って、現代的な問題や最先端の研究成果など個別のテーマを取り上げた展示をおこなっています。この企画展示場は、国内外の大学等の最新の研究動向を迅速に展示に結びつける、共同利用展示場としても活用しています。

みんぱくでは、情報機器を活用した展示を積極的に展開しています。ビデオテークは、「映像情報自動送出装置」として、みんぱくが世界に先がけて開発したものです。約640本の映像番組を自分で選択して視聴することができます。その映像を通じて、本館展示場内で紹介されている民族の生活や、その民族が生み出したモノが実際に用いられている様子を確認することができます。一方、世界ではじめての映像と音声による携帯型の展示解説装置「みんぱく電子ガイド」は、平成19年度に新しいシステムに更新され、軽量化とともに、利便性が大幅に向上しました。

また、探究ひろばでは、情報検索端末を用いて展示資料に関するさまざまな情報を検索したり、比較したりすることができ、関連する書籍やみんぱくの刊行物を閲覧することもできます。



みんぱく電子ガイド

展示資料が、どのような場所で、どのような人々によって、どのように使われているかを、映像と音声を使って解説する携帯型の展示解説装置です。日本語版、英語版、中国語版、韓国語版を用意しています。（平成25年度貸出件数:7,907件）

地域展示

地域展示では、世界を大きくオセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、西アジア、南アジア、東南アジア、中央・北アジア、東アジアの9地域に分けています。（各展示場名横の数字は展示場面積）

オセアニア 660㎡

| 移動と拡散　| 海での暮らし　| 島での暮らし
| 外部世界との接触　| 先住民のアイデンティティ表現

海がほとんどの面積を占めているオセアニアには、大小数万をこえる島々が点在しています。そこには、発達した航海術をもち、根栽農耕を営む人々が暮らしてきました。「移動と拡散」「海での暮らし」「島での暮らし」では、資源の限られた島環境で、さまざまな工夫をして生活してきた様子を展示しています。「外部世界との接触」「先住民のアイデンティティ表現」では、外の世界と出会うなかで、人びとが伝統文化をどのように継承、発展させてきたかを紹介しています。

アメリカ 320㎡

| 出会う　| 食べる　| 着る
| 祈る　| 創る

広大なアメリカ大陸には、極地から熱帯雨林まで、さまざまな自然環境が見られます。人びとは、それぞれの環境に応じた生活を営んできました。一方で、ヨーロッパ人による征服と植民の歴史を経験したこの地には、日常生活の隅々まで、外来の文化が浸透していきました。ここでは衣、食、宗教に焦点をあて、アメリカ大陸の多様性と歴史の重なりを明らかにするとともに、土着の文化資源に現代的価値を見出そうとする芸術家や工芸家のすがたを紹介しています。

ヨーロッパ 250㎡

| 生業と一年　| 宗教・信仰
| 産業化とともに　| 変動するヨーロッパ

ヨーロッパは、16世紀から20世紀にかけて、キリスト教や近代の諸制度をはじめ、さまざまな技術や知識を世界各地に移植しました。現代、この流れが逆転するなかで、世界中からの移民とともに、その文化も社会の一部となりつつあります。ここでは、時間の流れに注目しながら伝統的な生活様式と宗教、近代の産業化、さらに現代の新しい動きが層をなしてヨーロッパをつくりあげていることを示しています。

アフリカ 500㎡

| 歴史を掘り起こす
| 憩う
| 働く
| 装う
| 祈る
| アフリカの今

人類誕生の地とされるアフリカは、常に外部世界と結びつきながら変化を重ねてきました。私たちが、現在目にするアフリカ大陸の中の、文化や言語の多様性は、そうした変化の結果にほかなりません。人びとの「歴史を掘り起こす」営みに目を向けるとともに、現在のアフリカに生きる人びとの生活のありさまを「憩う・働く・装う・祈る」の4つのコーナーに分けて紹介しています。

西アジア
310㎡

- 信仰
- 砂漠のくらし
- パレスチナ・ディアスポラ
- 日本人と中東
- 音文化とポップカルチャー

中東ともよばれる西アジアの人びとは、自分たちが暮らす地域をマシュリク（日出ずる地）とよび、マグリブ（日没する地）とよばれる北アフリカと深い関係を保ってきました。乾燥地帯が大部分を占め、遊牧を生業とする人びとが移動する一方、バグダードやカイロなどでは古来より都市文化が栄えてきました。多くの住民はムスリムですが、ユダヤ教やキリスト教発祥の地でもあります。地球規模の変動の時代に移りゆく人びとの暮らしを紹介しています。

南アジア 600㎡

- 都市
- 工芸
- くらしと科学
- 牧畜
- 農村
- 漁村
- 神々と人間

インド亜大陸とその周辺地域は、社会・文化・言語いずれをとっても多様な様相を呈しています。展示では、この地域の民族文化の多様性を、都市や農村の暮らしや宗教生活に焦点をあてて、伝統文化と現代文化の両面を通して表現しています。

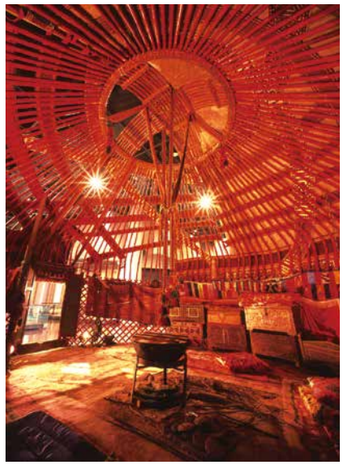
東南アジア 730㎡

- 稲作文化
- 海の生活
- 山の生業
- 生活の用具
- 信仰の世界
- 衣服と装身具
- ワヤンの広場
- 仏教の空間
- 都市の風景

東南アジアでは、インドや中国をはじめとするさまざまな文明の影響を受けながら、国や地域、民族のそれぞれに文化が花開いてきました。稲作や精霊の信仰など、風土や生活に根ざした文化も独自に展開しています。展示では、さまざまな文化の織りなす多彩な世界を表現しています。

中央・北アジア
710㎡

- 中央アジアの遊牧と農耕文化
- モンゴルの遊牧文化
- 北アジアの狩猟と漁撈の文化
- シャーマニズムの世界



ウラル山脈とカスピ海を結ぶ線の東にあたる中央アジアから、モンゴル、シベリアにいたる広大な地域を対象としています。展示はカザフとモンゴルの天幕を軸に、トルクメンやキルギスの人たちをふくめた牧畜文化、ウズベクやタジクの農耕文化、そして、シベリア諸民族の牧畜と狩猟の生活およびシャーマニズムをとりあげています。

東アジア 朝鮮半島の文化 330㎡

- 精神世界
- 住の文化
- 食の文化
- 衣の文化
- あそびの文化
- 知の文化

朝鮮半島の人びとは、外部の民族から影響を受けつつも、独自の文化を育んできました。有史以前は東シベリアの諸民族から、その後は中国から取り入れた文化要素を、独自のものに再編し、世界に例を見ないほど高度に統合された文化を獲得してきました。近代には日本に植民地支配され、独立後にはふたつの分断国家として急速な近代化を進めました。そして現代には、積極的に世界に進出する韓国人や、コリア系の海外生活者の姿も見られます。こうした文化の歴史的な重なりや躍動性を、精神世界、衣食住、あそびと知をテーマに紹介しています。

東アジア アイヌの文化 270㎡

- アイヌの狩猟・漁撈・農耕
- アイヌの送り儀礼

アイヌの文化の展示では、伝統的なかやぶき民家、漁撈や狩猟の生活、熊送りの儀礼などと、工芸の伝統と現代の世界を紹介しています。

東アジア 中国地域の文化 660㎡

- 生業
- 民族楽器
- チワン族の高床式住居
- 装い
- 工芸
- 台湾原住民族
- 宗教と文字
- 華僑・華人
- 継承される伝統中国

中国地域では、広大な面積と高低差のある地形がうみだす多様な自然環境のもと、さまざまな民族文化が育まれてきました。漢族が人口の90%以上を占め、平野部を中心に全国に居住しています。大陸の55の少数民族は、おもに西南、西北、東北地方の高地や草原に居住しており、台湾には漢族のほか先住のオーストロネシア系民族が居住しています。また、世界各地に、中国を故郷とする華僑・華人がくらしています。多様な生活環境から生みだされたさまざまな民族の文化を、歴史や地域性をふまえ、生業、装い、楽器、住居、工芸、宗教と文字、漢族の婚礼や祖先祭祀、台湾の原住民族、華僑・華人をテーマに紹介しています。

東アジア 日本の文化 1,460㎡

- 祭りと芸能
- 日々のくらし
- 沖縄のくらし
- 多みんぞくニホン

北海道から沖縄県まで、南北に細長い日本列島は、多様な自然に恵まれています。こうした環境のなかで、隣接する諸文化と影響しあいながら、さまざまな地域文化を展開してきました。また、近年では多くの外国人が私たちの隣人として生活をともにしています。ここでは、「祭りと芸能」、「日々のくらし」、「沖縄のくらし」、「多みんぞくニホン」という4つの角度から、日本文化の様相を展示しています。

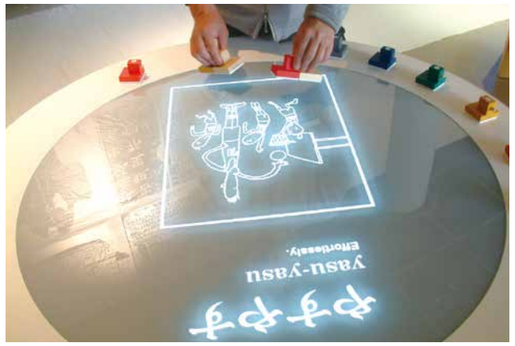
通文化展示

音楽 550㎡

|太鼓　荒ぶる音　|ゴング　伝え交わる音
|チャルメラ　演じる音　|ギター　歴史の中の音

私たち人類は、音や音楽によって意志や感情をつたえ、自分の位置を知り、訪れたことのない場所や過ぎ去った時に思いを馳せ、心を奮い立たせたり慰めたりしてきました。また、神仏や精霊など見ることのできない存在と交わってきました。この展示では、音や音楽と私たちの存在とのかかわりを、世界各地の楽器の例を通して考えます。

言語 170㎡



|言葉を構成する要素　|言語の多様性　|世界の文字

音声や身ぶりを媒体とすることばは、高度に発達した伝達手段で、感情から科学的な知識まで多くの情報を伝えることができます。文化の多様性を反映すると同時に、人間のもつ認知能力や創造性などを生みだすことばは、人類のもつかけがえのない資産です。インタラクティブな仕掛けを通して、ことばの仕組みと世界のことばの多様性について紹介します。

インフォメーション・ゾーン

イントロダクション

イントロダクション展示は、民博の展示の見方、文化人類学・民族学の考え方を直感的に身につけていただけるよう工夫した、文字通りのイントロダクション（＝導入）のための展示です。ここから世界への旅が始まります。

ビデオテーク

世界の人びとの儀礼や芸能、生活の様子、あるいは展示資料の背景を紹介する映像展示として、昭和52年に世界ではじめて本館が開発しました。その後改良を重ね、マルチメディア番組や研究者がフィールドワークで取材した貴重な研究用映像資料も公開しています。平成24年からの現行システムでは、番組をより多角的に検索できるようメニュー画面を充実させるとともに、ブース内部の雰囲気も明るく変え、視聴環境を整えました。また、車いすに乗ったままご利用いただける、ユニバーサルデザインを意識したブースを3台新たに設置しました。
（平成25年度リクエスト件数：62,195件）

探究ひろば

|リサーチデスク　調べて深める
|研究の現場から　知ってつながる
|世界をさわる　感じて広がる

展示資料の情報を検索して調べることのできる「リサーチデスク」、研究者が取り組んでいる調査を紹介する「研究の現場から」、展示資料を見てさわって理解する「世界をさわる」の3つのコーナーを通して、民博の研究や展示をより詳しく知ることができます。展示場で見た資料についてもっと知りたい、民博の研究者って何を調査しているの、モノと身近に接してみたい、という探究心を満たし、知識をさらに深める場としてご活用ください。

特別展示

特別展「マダガスカル　霧の森のくらし」

平成25年3月14日（木）～6月11日（火）
主催　　国立民族学博物館
実行委員長　飯田　卓
実行委員　［館内］岩谷洋史、上羽陽子、大貫美佐子（特別客員教員）、川瀬　慈
　　［館外］朝岡知子（朝岡工房）、佐藤優香（東京大学）

この特別展では、彼らのくらしと木彫り作品をつうじて、生活に息づく技術や伝承について考える機会を提供しました。
「霧の森」は、キツネザルやカメレオンで知られる東海岸の熱帯雨林以上に、人びとが森に寄りそって生きてきました。「霧の森」は、熱帯雨林から内陸にむかって標高を上がって1000メートルを超えたあたりで、インド洋を渡ってきた風が冷気にあたるところです。ここで焼畑をおこなうザフィマニリの人たちは、マダガスカルでほぼ唯一、大型（高さ3メートル）で様式化された木造家屋をつくります。
木製の調度も多く、開き戸式の木製窓に刻まれる幾何学模様は、生活に溶けこんだ彫刻としてはきわめて精巧です。彼らが生活のなかで伝えてきた木彫りに関する知識は、2003年にユネスコの「人類の口承および無形遺産の傑作」として登録され、3年後に、ユネスコ無形文化遺産となりました。

特別展「渋沢敬三記念事業　屋根裏部屋の博物館 Attic Museum」

平成25年9月19日（木）～12月3日（火）
主催　　国立民族学博物館
実行委員長　近藤雅樹
統括責任者　朝倉敏夫
実行委員　［館内］飯田　卓、太田心平、齋藤玲子、野林厚志
　　［館外］井上　潤（渋沢史料館）、
　　内田幸彦（埼玉県立歴史と民俗の博物館）、
　　齊藤　純（天理大学）、
　　佐藤美祢（埼玉県立歴史と民俗の博物館）、
　　佐野賢治（神奈川大学日本常民文化研究所）、
　　大明　敦（埼玉県立歴史と民俗の博物館）、
　　武田晴人（東京大学）、宮本瑞夫（宮本記念財団）

アチックミューゼアムとは、日本銀行総裁や大蔵大臣を歴任した渋沢敬三が、自邸の物置小屋の屋根裏部屋に設けた博物館兼研究所です。民博はここから始まる20,000件ほどの民具と研究思想を受け継いで設立されました。本展は約800点の資料で「渋沢民俗学」の広がりを示すもので、1階は渋沢の紹介に始まり、約100体の達磨や足半（あしなか）草履、筌やオシラサマ等とその共同研究の流れを追う展示とし、格子屋根と什器配置により屋根裏部屋の雰囲気を演出しました。2階では、渋沢の支援をうけた研究者や、日本民族学会附属民族学博物館へ継承されるなかで学会員らが収集した北海道・樺太、台湾、朝鮮半島の資料を展示しました。同時にこれら資料を活用した現代の事例を紹介しました。

企画展示

企画展(国際連携展示)「アリラン―The Soul of Korea」

平成25年5月2日(木)～6月11日(火)　プロジェクトリーダー　朝倉敏夫

韓国国立民俗博物館で2012年に開催した「アリラン展」を世界に巡回する一環として、旌善(チョンソン)アリラン研究所とも共同で、本館において世界で最初に公開しました。アリランは、朝鮮半島に出自をもつ人々の心や風土、歴史、文化などを知ることができる重要なキーワードの一つです。民族の魂を感じ取ってもらうよう、標本資料のみならず、映像・書籍のアーカイブを展示するとともに、アリランの公演も行いました。

企画展「アマゾンの生き物文化」

平成25年5月23日(木)～8月18日(日)　プロジェクトリーダー　池谷和信

アマゾンには世界最大の熱帯林が広がり、豊かな生き物文化が育まれてきました。インコやワシの羽を使った頭飾り、サルやペッカリーの歯の首飾りなど、アマゾンの人々の生活道具に活用されているこれらの動物は、「ペット」としても人々に愛されています。展示場では、アマゾンの雷や森の動物の声が流れ、蛇行するアマゾン川をカヌーでさかのぼるイメージで什器(じゅうき)を配置しました。山形県鶴岡市のアマゾン民族館・アマゾン自然館と民博がコラボレーションした本企画展は、民族資料とその資料に使われている動物の標本がリンクする民博でも初の試みであり、人びとの暮らしと自然や動物とのかかわり方の多様性を紹介しました。

企画展「武器をアートに―モザンビークにおける平和構築」(人間文化研究機構連携展示)

平成25年7月11日(木)～11月5日(火)　プロジェクトリーダー　吉田憲司

アフリカのモザンビークでは、1975年の独立後1992年まで続いた内戦の結果、戦争終結後も大量の武器が民間に残されました。現在、この武器を農具と交換することで回収し、武装解除を進めるとともに、回収された銃器を用いてアートの作品を生み出し、平和を訴えようという、TAE「銃を鍬に」というプロジェクトが進められ、内戦後の平和構築のモデルとして注目を集めています。このプロジェクトを通じて制作された「いのちの輪だち」をはじめとする民博が収集した作品と、「銃を鍬に」のプロジェクトを支援してきた日本国内のNGO「えひめグローバルネットワーク」が所蔵する作品をあわせて展示し、アートを通じて平和を築く営みを紹介しました。

企画展(国際連携展示)「台湾平埔族の歴史と文化」

平成25年9月12日(木)～11月26日(火)　プロジェクトリーダー　野林厚志

この企画展は、台湾で注目されている平埔族に焦点をあて、その歴史性と現代における民族アイデンティティの動向を日本で紹介することを目的とし開催しました。
平埔族の歴史や文化は、台湾における先住民族と16世紀以降に増加した漢族系移民との相互作用を考えるうえで非常に重要であると認識されるようになっています。台湾における民族をめぐる社会のこうした動きは日本ではあまり知られていません。本展では、日本の観覧者が台湾の民族間関係を理解し、さらには台湾社会を身近に感じるための機会を提供しました。
なお、本企画展は国立台湾歴史博物館(台湾台南市)と共催の国際連携展示として開催したものです。

博物館社会連携

本館では、国内外の博物館や大学などとの学術連携を通して、文化資源の系統的、有機的活用を実践するためのネットワークづくりを試みてきました。また、さまざまな団体と連携して、広く社会へ貢献する事業や活動を展開しています。

カムイノミ儀礼と北海道アイヌ協会技術者研修

カムイノミ儀礼

本館では、社団法人北海道アイヌ協会とのあいだに協定を結んで、ふたつの事業を実施しています。ひとつはカムイノミ儀礼の実施です。アイヌ語のカムイノミは「神への祈り」という意味であり、その実施は、本館が所蔵するアイヌの標本資料の安全な保管と後世への確実な伝承を目的としています。従来は萱野茂氏(故人、二風谷アイヌ資料館前館長)によって非公開でおこなわれていました。平成19年度からは、ウタリ協会(現アイヌ協会)の支部が順にカムイノミとあわせてアイヌ古式舞踊の演舞を公開することとなりました。平成25年度は苫小牧支部の協力を受けました。もう一つの事業はアイヌ協会が派遣する伝統工芸技術者の受け入れです。本館の所蔵する資料の研究・活用による学術研究の進展とアイヌ民族の文化の振興を目的としています。

音楽の祭日 in みんぱく

音楽の祭日

フランスで始まった夏至の日を音楽で祝う「音楽の祭典」が、平成14年から日本でも「音楽の祭日」として全国で開催されています。
本館もその趣旨に賛同し、平成15年から音楽を愛する一般市民に広く本館施設を開放して実施しています。平成25年は、6月30日(日)に20のグループや個人が、さまざまな楽器による演奏をおこないました。

学習キット「みんぱっく」

みんぱっく
「ソウルのこども時間」

学校や各種社会教育施設を対象に、本館の研究成果をわかりやすく伝えることを目的として、学習キット「みんぱっく」の貸出を実施しています。「みんぱっく」は世界の国や地域の衣装や楽器、日常生活で使う道具や子どもたちの学用品などをスーツケースにパックしたもので、13種類22パックを用意しています。異文化との出会いにおいてどのようにものを見つめ、それらと語らうことができるのか、その先にある物語をどう読みとるのかという、本館ならではのコンセプトで企画されています。

貸出パック　平成25年度　貸出件数のべ227件

- ●極北を生きる― カナダ・イヌイットのアノラックとダッフルコート
- ●アンデスの玉手箱― ペルー南高地の祭りと生活
- ●ジャワ文化をまとう― サルンとカイン
- ●ブータンの学校生活
- ●インドのサリーとクルター
- ●アラビアンナイトの世界
- ●イスラム教とアラブ世界のくらし
- ●ソウルスタイル―こどもの一日
- ●ソウルのこども時間
- ●ブリコラージュ
- ●アイヌ文化にであう
- ●アイヌ文化にであう２― 樹皮からつくる着物
- ●モンゴル― 草原のかおりをたのしむ

博学連携事業

校外学習や遠足など博物館見学の準備や事前・事後の学習に役立つツールを紹介することを目的として、春と秋の年に2回「先生のためのガイダンス」をおこない、授業での博物館活用の促進を図っています。また、中学生に「職場体験活動」の機会を提供しており、平成25年度は14名を受け入れました。

博学連携教員研修ワークショップ in みんぱく

本館の展示場や所蔵資料を教育活動に活用した具体的な実践例をもとに、博学連携のさまざまな可能性をさぐるための教員研修ワークショップです。日本国際理解教育学会と共催で、平成25年度は8月6日に開催され、教員(主に小学校など)150名の参加者がありました。このワークショップに参加した教員が、本館を社会科研修に活用するなど、実践的な成果が得られています。

ボランティア団体の活動

「みんぱくミュージアムパートナーズ(MMP)」は、本館の博物館活動をサポートする自律的な組織として平成16年9月に発足した団体です。館内で視覚障がい者を対象とした展示場案内、休日・祝日などのイベント、学校団体向けの展示場体験プログラムの企画、運営といった多岐に広がる活動を本館との協働で進めています。
「地球おはなし村」は、平成15年に開催した特別展「西アフリカ　おはなし村」を契機とし、平成17年10月に発足した団体です。アフリカの音楽活動や昔話の語り活動等をおこなっており、近隣の児童センター、小学校および児童福祉施設などでも広く活動をおこなっています。

国際協力・研修

JICA課題別研修：「博物館学コース」の実施 “Comprehensive Museology”

このコースは、博物館の運営に必要な、収集・整理・保存・展示・教育に関する実践的技術の研修を実施し、博物館を通じて各国の文化の振興に貢献できる人材を育成するものです。従来から、JICA課題別研修「博物館技術コース」の一環として、本館で約3週間にわたり「博物館学国際協力セミナー」を実施してきましたが、平成16年度からは、本館が国際協力機構（JICA）から全面的委託を受け、滋賀県立琵琶湖博物館と共同で、4ヶ月にわたる研修を「博物館学コース」として実施しています。毎年、開発途上の国や地域から約10名を外国人受託研修員として受け入れています。平成25年度はアルメニア・エクアドル・エジプト・グアテマラ・ミャンマー・パレスチナ自治政府・ペルーの7カ国から10名の研修員を受け入れ、4月12日から7月19日まで研修をおこないました。国立民族学博物館と琵琶湖博物館での実施だけではなく、東日本大震災の被災地や遠野市立博物館、東京国立博物館や国立科学博物館、広島平和記念資料館などへの研修旅行もおこないました。また研修員全員が、自国の博物館の活動や課題を報告し、検討する公開フォーラム「世界の博物館2013」を平成25年5月25日に国立民族学博物館で開催しました。77名の参加者があり、報告者と活発な意見交換を展開しました。平成26年3月までに、世界各地からの研修修了者は200名におよび、国際的ネットワークを築いています。

開講式

東北施設訪問

独立行政法人日本学術振興会（研究拠点形成事業B.アジア・アフリカ学術基盤形成型）

公開セミナー「博物館の社会的意義と人材育成」

本館は、平成24年度から3年計画で、日本学術振興会（研究拠点形成事業B.アジア・アフリカ学術基盤形成型）「アジアにおける新しい博物館・博物館学創出のための研究交流」を進めています。 初年度のモンゴルに続き、平成25年度は日本とミャンマーにおける博物館・博物館学の比較研究と研究交流を目的に、 9月21日から29日にかけて両国の博物館学・博物館の専門家ならびに教育研究者による「展示」と「保存とドキュメンテーション」をテーマとした共同研究会を、ミャンマーのバガンとヤンゴンで実施しました。また、共同研究会の一環として、9月27日、公開セミナー「博物館の社会的意義と人材育成」をヤンゴンのミャンマー国立博物館にて開催しました。全体を通じて、日本12 名、タイ1名、モンゴル1名、そしてミャンマーからのべ200名を超す参加者があり、活発な質疑応答、情報共有、意見交換がおこなわれました。

バガン考古博物館にて

ヤンゴン国立博物館での共同研究会

広報・事業

世界の諸民族の文化について、最新の研究成果を社会に公開するため、各種事業や広報活動を実施しています。

みんぱくゼミナール

毎月第3土曜日に、研究部の教員などが最新の研究成果をわかりやすく講演しています。

平成25年度実施 受講者総数 2,518名 （平成24年度 2,406名）

□印は特別展関連事業 ■印は本館展示新構築の関連事業 ○印は企画展関連事業

実施回数	実施日	担当講師	演題
□419回	平成25年4月21日(土)	飯田　卓	マダガスカル 霧の森のものづくり
□420回	平成25年5月18日(土)	内堀基光（放送大学）　聞き手：飯田　卓	マダガスカル 霧の森にくらす人びと
■421回	平成25年6月15日(土)	日高真吾 川島秀一(東北大学)	日本の漁業を考える
■422回	平成25年7月20日(土)	廣瀬浩二郎	色を創る、音で伝える、心に触れる―瞽女（ごぜ）がみた風景
■423回	平成25年8月17日(土)	笹原亮二 西岡陽子(大阪芸術大学) 福原敏男(武蔵大学)	つくりもの―ハレのかたち・おもしろいかたち
□424回	平成25年9月21日(土)	飯田　卓 木村裕樹(龍谷大学) 永井美穂(渋沢史料館)	屋根裏部屋博物館主人の横顔
○425回	平成25年10月19日(土)	吉田憲司	心の武装解除―モザンビーク「武器をアートに」プロジェクトを考える
○426回	平成25年11月16日(土)	野林厚志	台湾平埔（へいほ）族の歴史と文化
427回	平成25年12月21日(土)	藤本透子	カザフの死者儀礼―日常から展望するイスラーム
428回	平成26年1月18日(土)	川瀬　慈	熱狂エチオジャズ！！！
429回	平成26年2月15日(土)	樫永真佐夫	ベトナムの黒タイのうた、おはなし
430回	平成26年3月15日(土)	横山廣子	装いのセンスと伝承―中国のフィールドから

第419回「マダガスカル 霧の森のものづくり」

第421回「日本の漁業を考える」

第422回「色を創る、音で伝える、心に触れる―瞽女がみた風景」

第424回「屋根裏部屋博物館主人の横顔」

第425回「心の武装解除―モザンビーク『武器をアートに』プロジェクトを考える」

第426回「台湾平埔族の歴史と文化」

第428回「熱狂エチオジャズ！！！」

みんぱくフォーラム

平成20年度から本館展示場の新構築が始まりました。平成25年度には新しくなった日本の文化展示「祭りと芸能」「日々のくらし」セクションを広く社会に紹介するために、夏から秋にかけて「世界のニッポン、みんぱくのニッポン―夏～秋のみんぱくフォーラム2013」と題して、研究公演、映画会、ゼミナール、ギャラリートークなどのイベントを実施しました。平成26年度は、新しくなった朝鮮半島の文化、中国地域の文化、日本の文化「沖縄のくらし」「多みんぞくニホン」展示に合わせて、様々な関連イベントを実施します。

みんぱく映画会

上映される機会の少ない文化人類学・民族学に関する貴重な映像資料などを教員の解説を交えて上映しています。

平成25年度実施　参加者総数　2,761名　□印は特別展関連事業

□文化とはなにか―マダガスカルの生活文化、マダガスカルの音楽文化

実施日	担当講師	題名	参加者数
平成25年5月11日(土)	飯田　卓、川瀬　慈	ザフィマニリスタイルのゆくえ	122名
平成25年5月25日(土)	飯田　卓、亀井　岳(映画監督)	ギターマダガスカル	246名

文化の記録と映像表現―川瀬慈作品特集

実施日	担当講師	題名	参加者数
平成25年6月16日(日)	川瀬　慈	ラリベロッチ―終わりなき祝福を生きる― Room 11, Ethiopia Hotel 精霊の馬	172名
平成25年9月28日(土)	蘇　青(映画監督)、米　娜(映画監督) 管野奈津美(筑波技術大学) 中津真美(東京大学) 菊澤律子、小林昌之(アジア経済研究所)	白塔	155名

みんぱくワールドシネマ―映像に描かれる〈包摂と自律〉

機関研究「包摂と自律の人間学」のテーマにふさわしい映画を選び、研究者の解説による上映会をシリーズで実施します。立場による考え方の違いを互いに認め合いながら、公正で平等な社会をどのように実現すればよいのか、世界各地に視野を広げて、映画を通して考えます。

	実施日	担当講師	題名	参加者数
第20回	平成25年5月12日(日)	池田光穂(大阪大学)、鈴木　紀	私の中のあなた	323名
第21回	平成25年7月13日(土)	ヨトヴァ・マリア(国立民族学博物館外来研究員)、川瀬　慈	さあ帰ろう、ペダルをこいで	321名
第22回	平成25年9月15日(土)	野林厚志、小長谷有紀	再会の食卓	324名
第23回	平成25年11月10日(日)	松岡悦子(奈良女子大学)、小長谷有紀	人生、ブラボー！	270名
第24回	平成26年1月25日(土)	岩佐光広(高知大学)、鈴木　紀	ラビット・ホール	380名
第25回	平成26年3月16日(日)	砂川秀樹(レインボーアライアンス沖縄)、宇田川妙子	人生はビギナーズ	448名

研究公演

文化人類学・民族学に関する理解を深めてもらうことを目的として、世界の諸民族の音楽や芸能などの公演を実施しています。

平成25年度実施　参加者総数　1,355名　■印は本館展示新構築の関連事業

のど歌のふるさと

実施日　平成25年9月8日(日)
解　説　巻上公一(歌手)、小長谷有紀
出　演　モングンオール・オンダール
　　オトクン・ドスタイ
　　ボロット・バイルシェフ
　　タンダライ
　　ほか2名
参加者数　483名

共振する大地のリズム
―ブルキナファソ・カバコと佐渡・春日鬼組の競演

実施日　平成25年11月3日(日・祝)
解　説　仲野麻紀(音楽家)、吉田憲司
出　演　ムッサ・ヘマ
　　カバコ
　　佐渡 春日鬼組
参加者数　468名

■雄勝法印神楽みんぱく公演

実施日　平成25年11月23日(土・祝)
解　説　小谷竜介(東北歴史博物館)
　　片山毅(公益財団法人 美術院)
　　日高真吾
演　舞　雄勝法印神楽保存会
参加者数　404名

※翌日、奈良国立博物館で、本館共催による「雄勝法印神楽　神楽復興に生きた文化財修理のわざ」が開催されました。

みんぱくウィークエンド・サロン―研究者と話そう

研究部のスタッフと来館者が、展示場内でより身近に語り合いながら、みんぱくの研究を知ってもらうことを目的に、開館30周年記念事業として平成19年度に始まりました。平成25年度も引き続き、ほぼ毎週日曜日に計45回開催し、参加者は計1,635名でした。

会場風景

その他の連携事業

・平成25年10月26日(土)、在大阪モンゴル国総領事館主催・本館共催で「モンゴル秋祭り(ナマリーンバヤル)」を当館にて開催し、モンゴルの文化と習慣や蒙日の交流活動等を紹介しました。
・平成25年11月3日(日・祝)・11月4日(月・振休)に、北大阪の7市3町の美術館・博物館の文化祭「北大阪ミュージアムメッセ」を本館にて開催し、展示やワークショップ、楽器の演奏等がおこなわれました。
・「国立民族学博物館と吹田市との連携協力に関する基本協定」を締結しています。この協定は、双方の発展と充実に寄与し、地域連携を積極的に推進することを目的としています。また、「吹田市5大学・研究機関 生涯学習ナビ」(http://www.suita5u.com)へ参画し、情報発信を進めています。

マスメディアを通じた広報

広く社会に本館の研究や博物館活動について広報するため、マスメディアを通じた広報活動を展開しています。「報道関係者と民博との懇談会」（毎月第3木曜日開催）において、「研究こぼれ話」などのコーナーをもうけ、みんぱくの研究や博物館活動を積極的に紹介しています。25年度はテレビ（25件）、ラジオ（62件）、新聞（701件）、ミニコミ誌（125件）、雑誌（63件）、その他（12件）の各媒体総数988件で、本館の活動が紹介されました。
独立行政法人日本万国博覧会記念機構と毎日放送（MBSラジオ）の共催イベント「万博へGO！With　MBS　2013」へ協賛参加し、平成25年11月4日（月・振休）に、MBSアナウンサーの河田直也氏と池谷和信・本館教授のトークイベントを本館にて開催しました。

「旅・いろいろ地球人」
平成21年4月から毎日新聞夕刊（毎週木曜日）に掲載
平成17年4月から21年3月までは、「異文化を学ぶ」というタイトルで掲載

「みんぱく世界の旅」
平成25年7月から毎日小学生新聞（毎週土曜日）に掲載

出版活動

要覧
国立民族学博物館要覧2013
National Museum of Ethnology: Survey and Guide 2013-14

広報・普及
MINPAKU Anthropology Newsletter
月刊みんぱく
みんぱくカレンダー

展示解説
国立民族学博物館展示ガイド
展示図録「霧の森の叡智 マダガスカル、無形文化遺産のものづくり」
展示図録「屋根裏部屋の博物館 ATTIC MUSEUM」

利用案内
本館案内リーフレット（日本語、英語、こども用、点字）
展示解説シート（日本語、英語、中国語、ハングル）
団体見学利用案内
特別展展示案内リーフレット
大学のためのみんぱく活用マニュアル

design: mitsuo katsui

インターネット

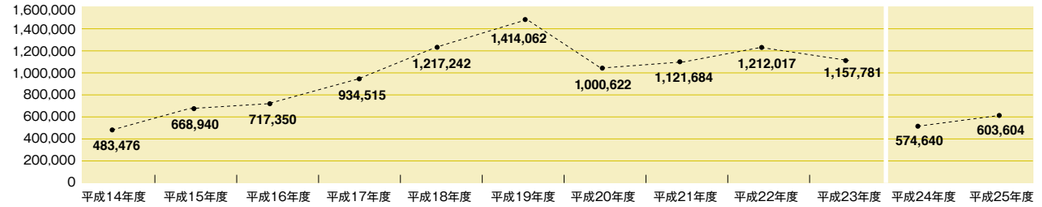
ホームページ　http://www.minpaku.ac.jp/
本館の研究活動、博物館展示・事業活動、大学院教育情報の他、刊行物、文献図書資料、標本資料など
あらゆる情報を世界に発信しています。

メールマガジン　http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews
メールマガジン「みんぱくe-news」を月1回発行し、最新の研究情報や、特別展・企画展情報、みんぱくゼミナール等の
各種事業のお知らせを配信しています。

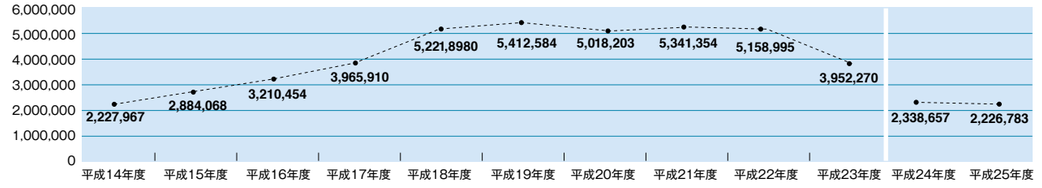
ソーシャルメディア　Facebook　http://www.facebook.com/MINPAKU.official
Twitter　http://twitter.com/MINPAKUofficial
YouTube　http://www.youtube.com/MINPAKUofficial

さまざまなソーシャルメディアを活用して、研究、博物館活動を情報発信するとともに、本館及び文化人類学・民族学に関心をもつ人たちが交流する場を提供しています。

訪問者数（Visits）　平成25年度　603,604



ページビュー数（Page Views）　平成25年度　2,226,783



※平成24年度より、統計方法を変更しました。

平成25年度の入館者数

年間入館者

入館者総数	192,241人
1日平均	630人
開館からの累計	10,098,774人

※大学・短大等からの団体入館者件数
大阪大学、大阪教育大学、大阪芸術大学、大阪国際大学、大阪産業大学、大阪樟蔭女子大学、大阪成蹊大学、大阪総合デザイン専門学校、関西大学、関西学院大学、京都造形芸術大学、京都大学、京都橘大学、甲南女子大学、神戸大学、神戸女子大学、神戸スポーツアートCocoro専門学校、昭和女子大学、杉野服飾大学、千里金蘭大学、東北学院大学、ドレスメーカー学院、名古屋学芸大学、阪南大学、文化服装学院、武庫川女子大学、淀川区医師会看護専門学校、龍谷大学
（以上、国内1団体50名以上）などから90大学3,796人

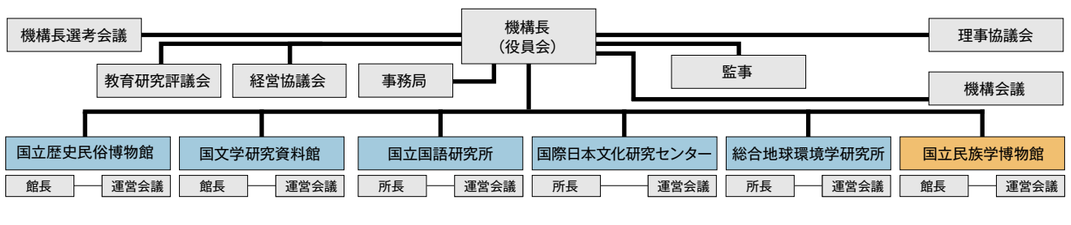
来館者1000万人達成

平成25（2013）年9月20日に、昭和52（1977）年の開館以来1000万人目の来館者を迎えました。オセアニア展示のチェチェメニ号の前で開かれた記念式典では、1000万人目の来館者を、ナイジェリアのハウサ族の衣装をまとった須藤健一館長をはじめ、世界各地の民族衣装を着た職員が出迎えました。
1000万人目の来館者には、1000万人目証明書、花束のほか、記念品として、開館時からエントランスで来館者を見守り続けてきたトーテムポールにちなんで、カナダのトーテムポールの置物など世界中から選りすぐった逸品を贈呈しました。
式典には、ボランティア団体の地球おはなし村のみなさんも駆けつけ、お祝いに迫力ある太鼓演奏を披露し、たくさんの来館者、報道関係者、本館職員が集まり、華やかな雰囲気に包まれました。

人間文化研究機構

大学共同利用機関とは、各研究分野における我が国の中核的研究拠点(COE)として、個別の大学では維持が困難な大規模な施設設備や膨大な資料・情報などを国内外の大学や研究機関などの研究者に提供し、それを通じて効果的な共同研究を実施する研究機関です。
大学共同利用機関法人 人間文化研究機構は、平成16年(2004)4月1日に設立され、当初は、人間文化にかかわる大学共同利用機関である、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所および国立民族学博物館の5つの機関で構成されていました。
平成21年(2009)10月1日には、新たに国立国語研究所が加わり、現在は6つの機関によって構成されています。機構は、これら6つの研究機関が、それぞれの設立目的を果たしながら基盤研究を進めるとともに、学問的伝統の枠を越えて相補的に結びつき、自然環境をも視野にいれた人間文化の研究組織として、大学共同利用の総合的研究拠点を形成するものです。
また、膨大な文化資料に基づく実証的研究、人文・社会科学の総合化をめざす理論的研究など、時間・空間の広がりを視野にいれた文化にかかわる基礎的研究はもとより、自然科学との連携も含めた新しい研究領域の開拓に努め、人間文化にかかわる総合的学術研究の世界的拠点となることをめざしています。
機構は、6つの研究機関が全国的な研究交流の拠点として研究者コミュニティに開かれた運営を確保するとともに、関連する大学や研究機関との連携・協力を促進し、研究者の共同利用および多面的な共同研究を積極的に推進しています。
機構には、国立歴史民俗博物館や国立民族学博物館および国文学研究資料館など、博物館機能や展示施設を有した機関が参画しています。その特徴ある機能を利用して、研究情報および研究成果を連携的に展示したり、さらには刊行物やあらゆる情報機能を活用したりして、広く国内外に発信し、学術文化の進展に寄与しています。
21世紀を迎えた今日、自然と人間の営為が地球規模で急激に絡み合い、さまざまな難問が顕在化しています。 人間文化研究機構は、すべての学問の基礎である人間文化研究の重要性を再提示し、21世紀の課題に立ち向かおうとしています。

組織図



運営組織 平成26年4月1日現在

役員	機構長　立本成文	理事　平川　南	理事　今西祐一郎	監事　広渡清吾
		理事　小長谷有紀	理事　榎原雅治	監事　駒形圭信

人間文化にかかわる総合的研究推進

21世紀における人類にとってもっとも重要で緊急の課題は、地球における人類の存続と、世界における人間の共生です。この難問を解く鍵は「文化」にあるとの認識に基づき、機構は人間文化研究の新たな領域を、従来の枠組みを越えて創出し、先端的・国際的な研究を展開するために研究活動を推進しています。
機構はこれらの活動をとおして一体的な取組みを行いながら、さらなる研究活動推進体制の構築・拡充を図り、人間文化にかかわる総合的な学術研究の発展に寄与することをめざしています。

連携研究

機構を構成する機関が培ってきた研究基盤と成果を、機関を越えてつなぎ、補完的、有機的に結合させることで、新たな視座を開拓し、より高次なものに発展させようと企画、実施してきたのが「連携研究」です。第2期中期目標期間では、中心となる連携研究の課題として、「『人間文化資源』の総合的研究」と「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」の2つのテーマを設定して研究を推進しています。
また、平成24年度からは、東日本大震災を契機として、新たに「大規模災害と人間文化研究」というテーマの研究を進めています。

連携展示

機構は、研究の成果を、刊行物・データベース・講演会・シンポジウムなどに加えて、展示によって迅速に国民に公開し、理解を進める、特色のある社会連携をめざしています。とくに、国立歴史民俗博物館・国立民族学博物館は、大規模な展示施設を有し、常設展示・企画展示を行っており、平成20年度からは国文学研究資料館も、展示室の公開を開始しました。
機構の特徴を活かした展示のひとつとして、複数機関が連携して実施する「連携展示」を推進しています。平成25年度には「東日本大震災と気仙沼の生活文化」、「武器をアートに―モザンビークにおける平和構築」を開催しました。

研究資源の共有化

機構を構成する6機関と地域研究の拠点が開発・蓄積した情報資源の学界での共有化を推進するため、研究資源共有化システムを開発・運用しています。同システムは、各機関等が蓄積する100を超えるデータベースと国立国会図書館NDL Searchを横断検索する統合検索システム(通称nihuINT)、年代・時代情報や地理的位置・地名情報の分析のための時空間解析システム(GT-Map／GT-Time)から構成され、機構のウェブサイトにて公開されています。
また、人間文化研究にかかわる諸機関・研究者と連携して研究資源共有化環境の構築を推進するため、平成21年度から「人間文化研究情報資源共有化研究会」を開催しています。

日本関連在外資料の調査研究

平成22年度より開始した日本関連在外資料の国際共同研究は、欧米やアジアなどにおける日本文化研究の比重低下の打開と、日本文化の世界史的意義を明らかにすることをめざしています。これまでの各機関や研究者による研究テーマ別の調査研究から一歩進めて、機構に「日本関連在外資料調査研究委員会」を設置し、そのもとに一体的な研究体制をつくり、多様な資料の総合的調査研究の推進、機構外の連携機関や海外機関との協力・協業による国際研究ネットワーク構築を進めています。第2期中期目標期間では、近世以降に日本から持ち出された資料群と近代以降の日本人の活動などにより海外に残された資料群という視点で、次の3テーマを推進しています。
「シーボルト父子関係資料をはじめとする前近代(19世紀)に日本で収集された資料についての基本的調査研究」
「近現代における日本人移民とその環境に関する在外資料の調査と研究」
「バチカン図書館所蔵マリオ・マレガ収集文書の保存・公開に関する調査・研究」(平成26年度開始)

地域研究の推進

我が国にとって学術的、社会的に重要な意義のある地域を総合的に理解・解明するために、関係大学などと研究拠点を共同設置し、拠点間のネットワークを構築することによって、地域研究を推進しています。
平成18年度からは「イスラーム地域」、平成19年度からは「現代中国」、平成22年度からは「現代インド」の地域研究を推進しています。平成24年度からは、各地域研究の協働による連携研究も開始しました。
本館にも現代インド地域研究拠点の1つが設置され、「現代インドの宗教:運動と変容」および「環流する現代インド文化」の2つの研究テーマを掲げ、海外の研究機関とも積極的に連携しながら、グローバル化し著しい変容を遂げつつある現代インドの宗教と文化の動態の解明に取り組んでいます。

情報発信

公開講演会・シンポジウム

機構では、専門を異とする6つの研究機関が結ばれたメリットを活かし、さまざまな研究活動を展開しています。 これによって得られた学問的成果を知っていただくために、定期的に公開講演会・シンポジウムを開催しています。

人間文化研究機構
第21回公開講演会・シンポジウム
「海を渡った日本語」
平成25年9月1日
一橋講堂(東京)

人間文化研究機構
第22回公開講演会
「画像資料による日本人移民への新視点―満洲・ブラジル・南洋」
平成25年10月11日
国際日本文化研究センター講堂(京都)

人間文化研究機構
第23回公開講演会・シンポジウム
「高齢期のウェルビーイングと多様な住まい方 かわりゆく人の生(ライフスタイル)から考える」
平成26年3月8日
イイノホール(東京)

刊行物

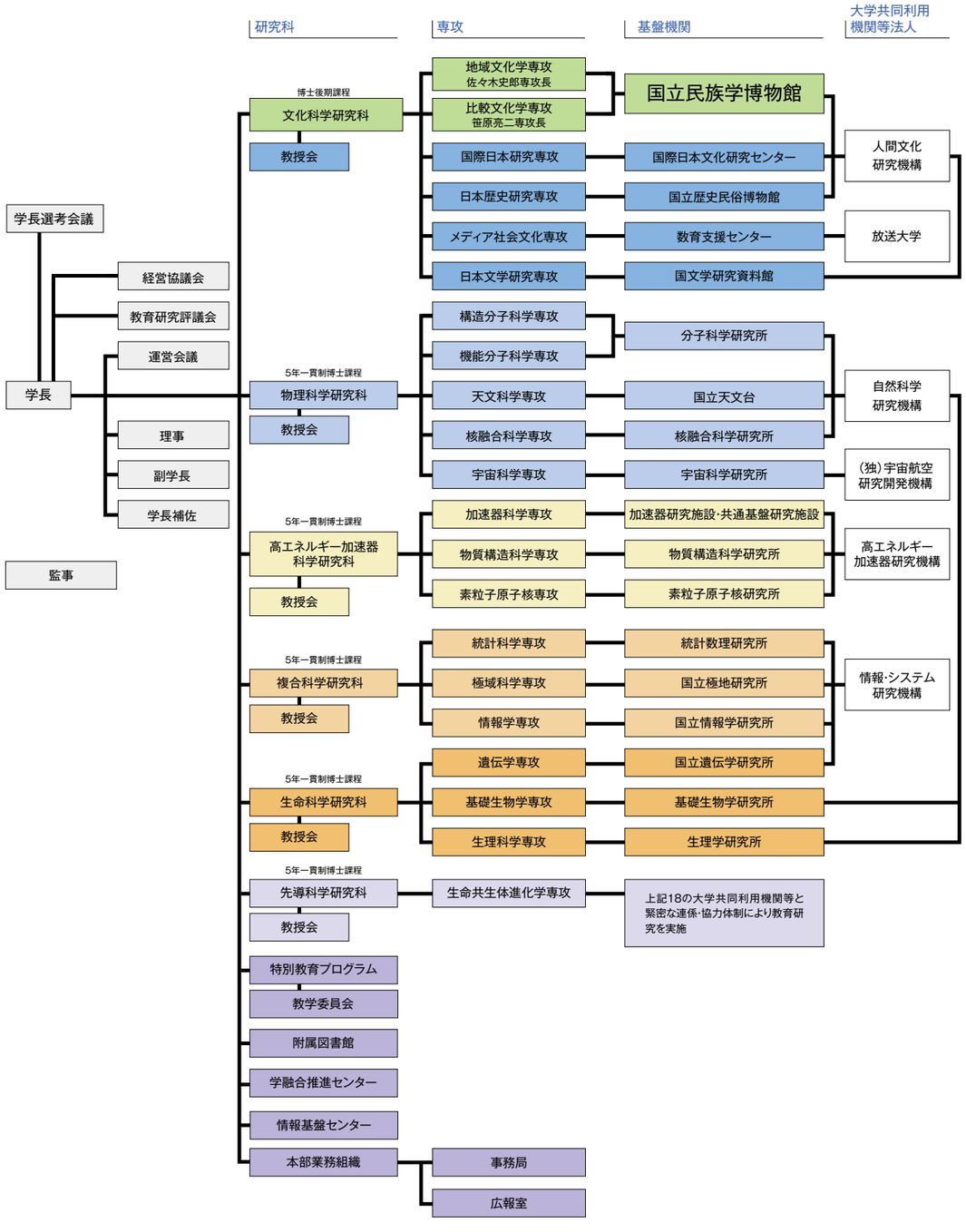
『HUMAN―知の森へのいざない』
機構が監修する一般向けの研究情報誌、人文学総合誌『HUMAN―知の森へのいざない』が平凡社より発刊されています。
第4号(平成25年6月刊行)は「巨大古墳と王権」、第5号(平成25年12月刊行)は「酒と日本文化」を特集しています。

『人間文化』
公開講演会・シンポジウムの内容を掲載した広報誌『人間文化』は、現在はvol.19まで号を重ねています。冊子での刊行はvol.13までで終了し、以降はウェブでの公開を行っています。(http://www.nihu.jp/sougou/jouhou/publication/ningen.html)

総合研究大学院大学

総合研究大学院大学は、学部をもたない大学院大学です。18の大学共同利用機関などとの緊密な連係・協力のもと、大学共同利用機関などの開かれた機能を生かし、各研究科・専攻間、国の内外の大学・大学院との相互交流を深めることにより、幅広い視野や総合性、豊かな国際性をもった高度な能力を有する研究者の養成を目的としています。

組織図



大学院教育

本館には、総合研究大学院大学の文化科学研究科(地域文化学専攻・比較文化学専攻)博士後期課程が設置されています。両専攻は、全国の研究者などの共同研究推進に寄与している大学共同利用機関などの人材と研究環境を基盤として、教育・研究をおこなっています。

地域文化学専攻・比較文化学専攻の目的

教育研究は、個々の教員による授業や研究指導と、複数の教員が指導する共通のゼミナールからなっています。共通のゼミナールには、主に1年次生を対象とする「基礎演習(通称「1年生ゼミナール」)」と、2年次生以上を対象に、論文作成の指導を中心とする「演習」(通称「論文ゼミナール」)があります。

また、主として1年次生を対象として、文化人類学・民族学にかかわる共通科目(特論)が開講されています。

これは、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、大阪大学大学院人間科学研究科、神戸大学大学院の国際文化学研究科、人間発達環境学研究科の2研究科、京都文教大学大学院文化人類学研究科との、学生交流協定に基づく単位互換対象科目にもなっています。

学生はおおむね1年次においてフィールドワーク(現地調査)の準備をすすめ、2年次以降、指導教員の指導のもとに調査地でのフィールドワークをおこないます。そして調査終了後、指導教員による個別の指導や「論文ゼミナール」での指導を受けながら学位論文の完成をめざします。両専攻の教育研究目的は、次のとおりです。

Ⅰ. 文化人類学・民族学の独創的な研究
Ⅱ. 長期のフィールドワークでえられた資料にもとづく学位論文の作成
Ⅲ. 広い視野をもった、人間性豊かな研究者の養成

地域文化学専攻・比較文化学専攻の学生

大学院入学定員および現員

平成26年4月1日現在

専攻	入学定員	現員 1年次	2年次	3年次	計	備考
地域文化学専攻	3	3	2	6	11	
比較文化学専攻	3	5	2	7	14	
計	6	8	4	13	25人	

年度別学位記授与者数

年度	地域文化学専攻 課程博士	論文博士	比較文化学専攻 課程博士	論文博士	計
平成3年度			1		1
平成4年度					
平成5年度			1	1	2
平成6年度	2		1		3
平成7年度	2		1		3
平成8年度		3			3
平成9年度	3		4		7
平成10年度	4	2			6
平成11年度					
平成12年度	2		2	1	5
平成13年度	1	1	2	1	5
平成14年度	1	1		2	4
平成15年度					
平成16年度	2	3			5
平成17年度	4	2		2	8
平成18年度	2		3		5
平成19年度	2	1	3		6
平成20年度	1		1		2
平成21年度		1	1	1	3
平成22年度	2		2	3	7
平成23年度	3		1	1	5
平成24年度	1	1	1	1	4
平成25年度	0	0	1	1	2
計	32	15	25	14	86 人

論文博士号取得希望者の受入

日本学術振興会が実施する「論文博士号取得希望者に対する支援事業」の支援を受ける者(論博研究者)が、大学院の受入研究科において研究指導にあたる教員の下、研究をおこないます。

利用案内

開館時間

開館時間　10：00 ～ 17：00　（入館は16：30まで）
休館日　水曜日　（水曜日が祝日の場合は、翌日が休館）
年末年始　（12月28日～1月4日）

観覧料

区分	個人	団体（20名以上）及び割引※
一般	420円	350円
高校・大学生	250円	200円
小・中学生	110円	90円

特別展はその都度別に定めます

毎週土曜日は、小・中・高校生は無料で観覧できます。
（ただし、自然文化園（有料区域）を通行する場合は入園料が必要です。）
障がい者手帳をお持ちの方は、付添者1名とともに無料で観覧できます。
日本文化人類学会会員及びICOM（国際博物館会議）会員・日本博物館協会会員の方は、無料で観覧できます。（要会員証）

以下の方々は、割引料金で観覧できます。
20名以上の団体、大学等＊の授業でご利用の方、授業レポート等の作成を目的とする高校生、
3ヶ月以内のリピーター、満65歳以上の方（要証明書等）
＊大学等は、短大、大学、大学院、専修学校の専門課程
＊なお、短大生・大学生・大学院生の方は、教員が同行し、本館の展示場で授業を行う場合は、事前にお申し込みいただくと、観覧料が無料になります。詳しくはお問い合わせください。
（自然文化園各ゲートで本館の観覧券をお買い求めの場合は、本館窓口で差額を返却いたします。）

お問い合わせ先

Tel.06-6876-2151（代）

ホームページ　http://www.minpaku.ac.jp/

案内・サービス

■国立民族学博物館友の会　お問い合わせ先：Tel.06-6877-8893（千里文化財団）　本館1階エントランスホール「友の会カウンター」

「国立民族学博物館友の会」では、本館研究者の協力のもとに、『季刊民族学』を発行し、多様な文化に直接ふれる「研修の旅」や「体験セミナー」、各種講演会などを催しています。

■ミュージアム・ショップ　（営業時間 10：00 ～ 16：00）　お問い合わせ先：Tel.06-6876-3112

世界各国の工芸品や文化人類学・民族学に関する書籍などを購入することができます。

■レストラン　（営業時間 11：00 ～ 16：30　ラストオーダー 16:00）　お問い合わせ先：Tel.06-6876-1293

本格エスニックメニューを提供しています。カフェのみのご利用も可能です。
座席数は110席あり、少人数から団体まで予約いただけます。また、団体のお客様については弁当の予約も可能です。

友の会カウンター

ミュージアム・ショップ

レストラン

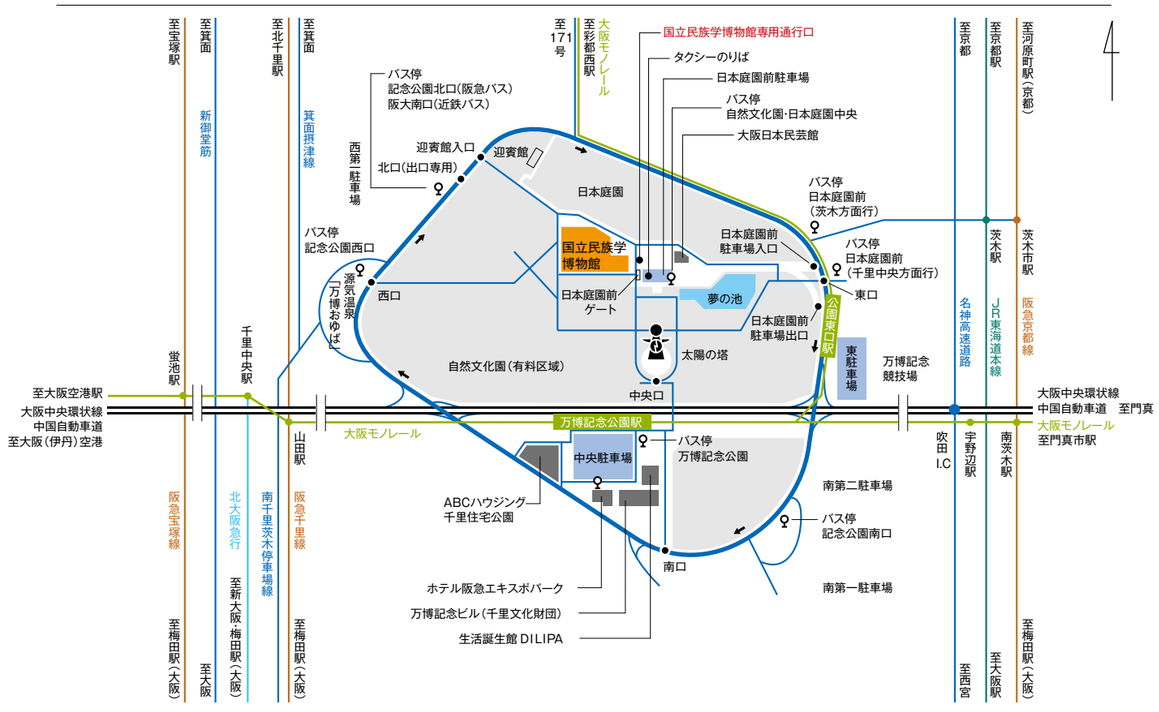
友の会主催「海外民族学研修の旅」

友の会刊行物
『季刊民族学』

交通案内

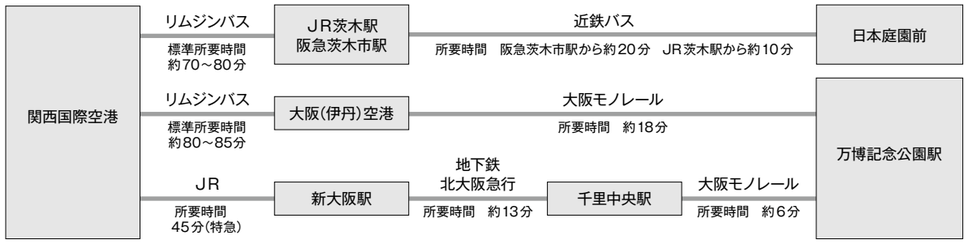
■大阪モノレールで「万博記念公園駅」または「公園東口駅」から徒歩約15分。
自然文化園（有料区域）を通ってこられる場合、自然文化園各ゲート脇の券売機で当館の観覧券をお買い求めください。
同園内を無料で通行できます。また、「公園東口駅」からは、自然文化園（有料区域）を通行せずに来館できます。
■近鉄バス（阪大本部前行き）で阪急茨木市駅から約20分・JR茨木駅から約10分、「日本庭園前」下車徒歩約13分。
■乗用車の場合は、万博記念公園「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。
■タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。
「日本庭園前ゲート」横にある当館専用通行口をお通りください。

周辺図



主要ターミナルからのアクセス

当館までの交通手段はいくつか方法がありますが、主要ターミナルからのアクセスには、次の方法が便利です。



要覧
2014

国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1

ISSN 1344-5413　2014. 6 発行